

関山

かんざん

第5号



寺報 中尊寺



地鎮式鎮壇具



神事能「俊成忠度」



寺庭婦人得度式

目次

爾時	買首 千田 孝信	2
〈ハス種子・発芽・育分真敷〉		4
寺報ぐらびあ		5
いのちの言葉 ことばの命	大岡 信	9
「中尊寺ハス」の開花まで	長島 時子	32
新讃橋蔵(宝物館)新築工事地鎮式に当たって	千田 孝信	40
季語に寄せて		44
研究／出版		51
ゆかりの地探訪／ルポルタージュ	佐々木邦世	53
清貧の一徹居士 北嶺亮詮師〔誌上回想〕		57
風信／語録		59
年中法会差定		62
〔陸奥教区宗務所報〕		67
執務日誌抄		70
浄財御奉納者 御芳名		82
赤堂稲荷島居奉納・不動尊祈願		83

爾時

貫首 千田孝信

日頃親しくご厚誼をいただいている知人が、最近奥さんの為に茶室を新築された。小屋みたいなものでご謙遜であるが、その入念の造作もさることながら、何ととっても、茶室からの眺望がいい。東稲山を一望に収め、北上右岸に一面に広がる稲田の右手には中尊寺の杜も見える。

茶室にふさわしい風雅な名をというので、思案の末に「爾時庵」と命名して画仙紙に筆を染めたら、出入りの棟梁が、杉の銘木の板に見事に彫りこんで、これを茶室の入り口に懸けてくれた。何とか格好の形に納まったのがうれしい。

さて、その「爾時」である。

出典はもちろん法華経。法華経八卷二十八品のうち、序品と化城喻品を除くすべての品は、必ず「爾時」という文字から始まる。爾時は「爾の時」の意味であるが、単なる接続詞の「その時」ではない。釈尊説法の地・靈鷲山に於て、千二百の菩薩や阿羅漢の顔触れが揃い、大衆の心も満ちわたり、時も熟しきって、聴聞の行儀が全く整った「爾の時」、世尊が、安祥として三昧からお起ちになり、無上甚深微妙の法が、今まさに説かれる。そのドラマチックな絶妙の時点を「爾時」というのである。茶室は、単なる趣味すさびの空間ではないといわれる。茶室は「一期一会」の場、いわば茶礼の一つびとつの所作にいのちを託す道場だともいわれる。これにふさわしい命名は「爾時」しかない、と

信じた命名を主人は果たしてよろこんでくれたろうか。朝ごとにひんがしの空を茜に染めて、東稲山並みから太陽が昇る「爾の時」、静かに茶を点てて喫する味は、この世の醍醐味ではないか。稜線から満月がさしのぼる「爾の時」、一碗の茶はまさに甘露の味わいであろう。

ことしの夏の朝まだき、八百年の眠りから覚めて、中尊寺の古代ハスが一輪の花を開かせた「爾の時」、天地は悲劇の御館の作佛を尊重讃歎したのである。

もちろん、人生は、いつでも朝日が昇る時ばかりではない。月は満ちては欠け、風も吹き雨も降る。世の中に悲劇は絶えない。しかし、人生いつでも「爾の時」であり、一瞬一瞬が「一期一会」の絶対の爾時なのである。山川草木は、いつでも、靈鷲山無言の説法を奏でている。靈鷲の一会は、厳然として未だ散じてはいない。心耳を澄ました爾時に、微妙の法味が体得されよう。

爾時

孝信



中尊寺蓮
1136年(平安時代)

(1)



(2)



(3)



(4)

「中尊寺ハス」の開花まで
32p 参照



(5)

寺報 ぐらびあ

*新讚衡蔵 地鎮式

……三月十四日

三月十四日の吉辰を卜し、建設委員・来賓および工事関係者八十二名のご臨席のもとに厳修。貫首導師が、一山大衆による諸天讚の声明老杉に響くうちに台密如法に地を鎮め、工事の安全と竣工を祈願された。

扉の写真・鎮壇御幣は助仕の手製になる。大地に饌米木実を埋納して人間が建築用地として土地を掘削し、重荷を積んで使用する許しを神祇に謹んで請うのである。

式後、供養席（平泉レストセンター）において貫首が新讚衡蔵建設に寄せる所信を述べ挨拶とした（本誌掲載）。

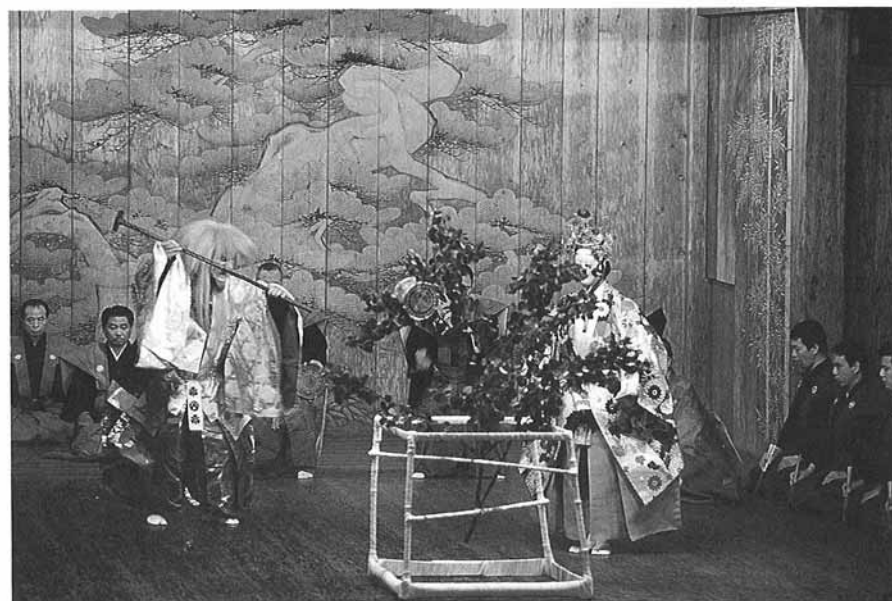


*平泉文化会議所セミナー
（名誉町民 藤島亥治郎先生（百歳）
「最終講義」（交誼）盛会
……五月二十三日
長年、史跡平泉の発掘調査を陣頭
指揮してこられた藤島先生も百歳。
思い出すままに昔を語り、古都平泉
のあるべき姿を提言。ただしご本人
はまだ九十九歳、「最終講義」とは
不本意の由を力説。老いてなお豊
饒しとが。



* 写経の奉納
 ……十月七日
 昨年始行された法華経頓写ならびに十種供養会。今年はさらに、一山の僧のみならず寺院婦人・職員有志・門前会の方も紺紙金字写経を初体験。

* 薪能
 中尊寺薪能も、降らないジンクスが今年には破れた。初番「百万」の幕と同時に降雨。しかも測候所始まって以来の豪雨にみまわれ、軒下などに避難してひたすら待つこと三十分。雨はサッと上がったが、大半の方は膝のあたりまでずぶ濡れに。しかし、九百人余の方がそのまま席に戻って次の「出」をまった。「見所のお客様に教わりました」と、粟谷師。ただ、百人ほどの人が中止と思われ込まれ帰途に。対応の拙さ反省を。



* 第二十二回 中尊寺薪能……八月十四日
 能「百万」(上)
 「綾鼓」(下)
 狂言「棒縛り」(7頁上)



* 秋の藤原まつり……十一月三日
狂言「附子」



* 大節分会……二月三日
明春も、琴錦関を迎えて「内も外も福」「自利利他円満」に。

いのちの言葉 ことばの命

大岡 信

(一)
言葉についての話というのは、尽きることがない、と思います。今日は、朝日新聞に連載している、私が書いている「折々のうた」というのがあるんですが、十八年前から断続的ではありませんが、断続的というのは、一年ずつお休みをとらせても良かったことがあります。現在、満でいうと十四年目に入りました。そこでいろいろ出会った言葉、全部素晴らしい言葉だったんですが、それらの中から幾つかご紹介しながらお話をしようかと実は思ってたんです。ところが、一閃に伺ったわけですから、大槻文彦のこともちょっとお話をしたいと思います。文彦の父は磐溪、祖父が大槻玄沢（号は磐水）です。

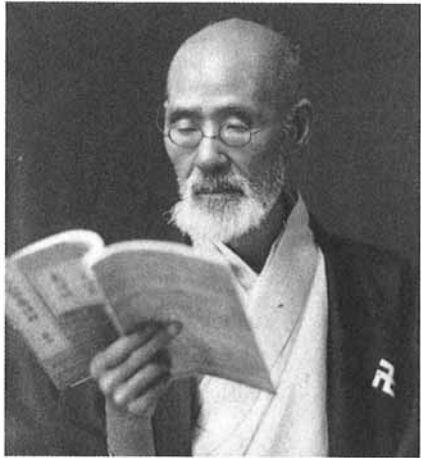
これは、ちょうど今から二〇〇年くらい前になります。大槻玄沢（磐水）は、三十代の半ばぐらいだったと思いますけれども、この磐水という人は日本の蘭学における最も優れたオランダ語の天才と言っているくらいオランダ語の達人だったわけです。皆さんご存じかと思うんですけど、杉田玄白という人が『解体新書』というオランダの解剖学の本を何人かで訳した。その中には非常に優れた蘭学者もいたんですけど、それらの先駆者の次の世代を代表するのは玄沢つまり磐水です。杉田玄白に頼まれて磐水は先輩たちが苦心惨澹して訳した解剖学の本『解体新書』をもう一度、「君、ちょっとこれを見て、訂正するところがあったら直してくれないか」と言われて、実際に非常に詳しい注釈つきの改訳版、『重訂解体新書』を出したんです。これは、大槻玄沢（磐水）の著作です。そういう本を作っておられて、本質的に言葉が非常に好きだったということですね。『重訂解体新書』という本は、「注」がものすごく多い。私はまだそれをきちんと読んだことはないんで

す。ただし「注」が非常に豊かで正確であるということは有名な話です。

現在出ている書籍で注をいっばいつけていているということは、学術専門書以外にはほとんどありません。昔の本だったら何でも注が必要ですね。その注がどれくらい正確にたくさんあるかどうかというところで、その本の価値が決まってくるわけです。そういう場合に大槻磐水の仕事はひじょうに評価が高い。注が非常に豊富であるということですから。注をつけるのがたいへん好きだということはい、即ちこの言葉はこういう意味だということですから、言葉が好きでなければできない仕事です。大槻磐水が、こういう本を作ったということは、即ち、日本の最初の、本当の意味での近代的な国語辞典の『言海』を作られた大槻文彦の祖父であるということを示しているんですね。二人の間の磐溪、文彦の父は漢学者なんですね。面白いですね、お祖父さんは蘭学、オランダ学の先駆者で、お父さんはすぐれた漢学者で、仙台藩の学問における重要な代表者でもあった。そして、

その孫の文彦は日本語の辞典を作った。大槻家、大槻文彦という人は、言葉好きの家系の何代かの末に至ったということですね。文彦のお兄さんもやっぱり蘭学をやっていますし、学問の家なんです。学問の家であるというだけでなく、大槻文彦の場合には、私が非常に感心し、こういう人だったからできたんだらうなと思っているのは、実は、専門の学問を一つも持たなかった。

本人は自分は雑学しかやらなかったと言っているんですけども、本当に雑学的なんですね。その雑学の尊さというものをこれ程に示している人もなくて、これは、現代の日本の学問、教育全般に対する偉大なる皮肉じゃないかと思うんですね。今の日本の教育というのは、全部専門的にやらないといけない。そして、その専門分野でいい点を取らないとい学校へ行けないというふうな強迫観念にとらわれている社会です。いまだにその馬鹿馬鹿しさがある。性根に染みているはずなのに分かっていないのが、親の方の、お役人たちを始めとする国策の決定機関の、決定権を



握っている人々の考え方だろうと思います。そして、一般の教育者もそういう考え方に毒されていると思います。

学問というのは、どこか一つの分野のことを一生懸命やるということが学問ではないんです。むしろ広がりがある、いろんな知識があって、好奇心を持って、いろんな知識を修めながら、尚かつどんな分野の専門家に伍してもちっとも負けない。むしろ、その分野だけという専門家に足りない。

い、別の知識をいっばいつけているというのが本当の意味の学者だと思います。私のそういう考え方自体が日本では非常に「だめだ、だめだ」ということになるのかもしれませんが。

たとえば、文彦のお祖父さんの磐水は、「オランダ正月」という言葉をご存じの方がいると思うんですけども、「オランダ正月」の第一回をやった人です。オランダ正月というのはどういうのかというと、その当時は太陽暦じゃなく太陰暦ですね。その陰暦で生活している日本の中で、太陽暦というものを意識して、しかもその元日というものに着目して、太陽暦の元日にオランダ学をやった連中が集まった。どこへ集まったかというところ、この磐水の家に集まった。磐水が江戸に塾を持っていた。そこにオランダ学者が集まって、オランダ正月というものをやりました。お正月にみんなが集まって「新年おめでとう」をやっただけなんですけれども、記念的な出来事だったんです。それが今からだいたい二〇〇年前です。彼が三十代の半ばぐらいで、そういう意味では実際に自分の

持っている知識というものをただ持っているだけじゃなくて、実際に実現していく。つまり、太陽暦というのはこの日だと。だからこの日にみんなが集まって新年を寿ことほごうじゃないかということを実際にやっていくということが実行家の精神であり、それが雑学者の精神とも近いんです。そういう意味ではこの特に三代の傑出した人物を生んだ大槻家の伝統というものは非常に偉大だと私は思っています。

大槻文彦の話をもう少ししますと、これも現代の教育に対する一つの皮肉のようなことにもなるかもしれません。こんなふうなことを文彦は自伝で、「自伝」という題の談話を今の「毎日新聞」、昔の「東京日日新聞」の記者に答えて語っているんです。これは明治四十二年のことです。彼が、当時六十三才の頃です。少々長いですが、今はこういう話を聞くと「なるほどなあ」と思うことも多い話なので、ちょっと引用させて下さい。日々新聞の記者に向かって、いろんなよもやま話風に自分の過去のことを語っている一節です。

「著述して出版しても一読の上反じや古紙こにされるようなものはつまらぬ。とにかく人々の本箱に備えて置かれるものを心掛けねばならぬ。それだから私は小説や詩歌などにはかからぬ、有用と思うことを間違いないように、できるだけ完全にと十数年も掛けて作る。」

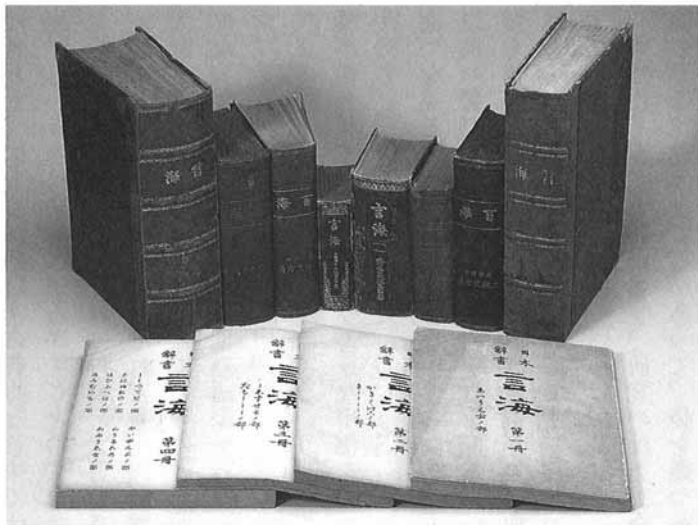
小説や詩歌などには、と言っているのは皮肉ですけれども、これは有用ではないと大槻文彦は考えたんですね。有用なもの何かと云ったら、言葉に注目するならば、それは辞書を作るということなんですね。もっとも、辞書を作るということを、彼は始めから考えたわけじゃなくて、文部省から命令されて辞書を作り出した。彼はわりと簡単にできると思っただけです。ところが、何十年もかかったわけです。一人で作った。奥さんをはじめ親族も栄養失調で倒れる。それくらいの貧困、苦しみに耐えて作られたのです。「言海」という辞書は、今日ではその解説記述では不十分な場合もありますが、そういう意味では「言海」をそのまま今

の学生が使って勉強するわけにはいかないんですけれども、にもかかわらず古典的な意味では『言海』というのは絶対に揺るがすことのできない地位を占めていますね。それは以前、大野晋さんと一緒にここへ伺ったんですけれども、国語学者の大野さんがおっしゃったことで、今の学者が必死になっっている一つの言葉の語源から何かを探します。それから、その言葉の用例をなるべく古い時代まで遡さかのぼって、こういう時にこういう形でこの言葉が使われている、というふうな用例を調べるわけです。それを随分やって、ハッと気がついて『言海』を見ると、思いもよらないくらいのもっと以前の資料で、しかも見事にそれを掴つかんでいて解説も書いてある——というふうな例が『言海』にはあって、あれは恐ろしい辞書です、とおっしゃっていました。

本当にそうだと思います。研究の仕方が今の学者とまるで違うところがあって、袋を幾つかぶら下げておくんです。そして気がついたらすぐに写して、紙切れをそのまま袋に入れておくらしいん

です。その袋に相当たまってきたら、その袋を開いて自分で必要な記事をいろいろと分類しながら自分の辞書のための資料にしていくというやり方でやっていました。そうやっていた物の中に、現代の大野晋さんといった代表的な国語学者ですけれども、その国語学者の大野さんが感嘆して「恐ろしい辞書ですよ」とおっしゃった、そういう意味でのいろんな物を多方面に、多様に語彙ごい、事項を集載していく。その努力というものがとても人間技とは思えない。

しかも辞書は、一冊の国語辞典を一人で作るということはとても難しいわけで、何人も助手を使います。ところが、文彦の場合は助手というのはほとんどいませんでした。特定の方はいましたけれども、その人は辞書を作るといよりは、むしろ文彦がやったものを整理するということをしていました。実際に言葉を集めて来ては書き留めていて、それを辞書を作るためにコツコツと溜ためめていったのは文彦一人なんです。そういうことは今では全くなくなりました。文彦は、『言海』



を作るだけではなくて、それ以前にもずいぶんいろいろなものを行っています。たとえば、石版画の原理、つまりリトグラフの原理みたいなものを本に作っているんです。ですから、本当に雑学なんです。それが素晴らしいんです。こういうふうな考えですから、有用な物というものにずっと目的を集中して、小説や詩というものは彼にとっては無用だったんです。無用であるということは、別の意味では詩とか小説にとって、それこそが名誉なことであり、存在理由でもあるんです。無用なものであるということが。だけれども、それはここではまた別な話です。

「私は何々の書を作ろうと思うと、大きな紙袋を幾つも置いて、いろいろな書物を読むたびに、そのことに関係した所を見ると書き抜いて、それぞれの袋へ押しこんで置く。長い文であるとか書の何枚目と記して押しこんで置く。忙しいからこうするのである。かようにして幾年も経るうちに袋がだんだん膨れてくる。たいていに膨れた時に開いて広げて前後次第を付け、また諸書（いろんな

本から書き抜いて遂に一書を作る。かようにやっている」。有用と思うことを間違いのないようにやろうと思って何十年もやっていた。

「思い立ったことは幾年かかろうが倦まず撓ゆまず続けてやれば終にはできる。始終勤めがあるから」、文彦は文部省の関係で、宮城県師範学校を創立したり、校長を命ぜられて在勤しています。そこへ赴任しながら、にもかかわらず、どこへ行っても辞書を作るということを常に思っていて、ちょっと面白い言葉使いをする人がいたら、すぐその側へ行って書き留めるんです。だからかなり変な人と思われたこともあったんです。でも、そんなことは言っただけでいられた。で、『言海』には一つの語の注釈があって、その後にもっと短い形で引用があるんです。何とかいう本の引用かということがちゃんとある。それが実に見事に、いろいろなバラエティーがある。

「——始終勤めがあるから、自分の時間としては洋燈の下の外なく、年々、暑中休暇が命で、この間に自著の編集をする」暑中休暇だけが仕事のた

めの、ある意味でのゆったり時間の使える時だったということですね。「頼まれた書き物の一年中の筆の借金を払う」他に頼まれた書き物がありませんね。そういうものは暑中休暇にバァーッと集中的にやっちゃうらしいんです。

「人は休暇中に骨休みをするが、私はいつも炎熱中や洋燈の下で、毎夜十一時十二時でも筆硯をもって著作に従事している。しかしながら、いくら勉強しても才は短いし、見識は低いし、学力がないからろくなものができない」——とんでもないことを言っていますね。

「誠につまらぬ境涯である」、これは本当にそうだった。本当にこの人はつまらない境涯だと思ふことがいっぱいあったに違いない。奥さんが亡くなった時も、本当に申し訳なかった、こんなにひどい生活に耐えてくれて、そして自分を常によく支えてくれた。何も楽しませないうちにお前は死んでしまった、と。切々たる文章を『大言海』の、いや『言海』にもありましたね、その「後記」に辞書を作る間の艱難辛苦について語っています。

す。つまりらぬ境涯であると書く理由が実際あったんです。

「政治家や実業家などの目から見たら、常に反古紙のようなものでござるをされているから、鼠のようにでも思うであらう。」この辺は皮肉です。さて、以上の著述で私の学問がいかにも雑駁であると思われる。自分でもあきれる。荒物屋の店のようで、いろいろの品はあるが上等の物はない。まだ種々な著述の草稿もあるが皆そうである。かような雑学になったは辞書などを作ったからであらうが、私の生まれ時が悪くて——」これはなかなか意味深長ですね。幕末に生まれて明治を生きただけから。「生まれ時が悪くて、今の文明の教育を施されるようになった頃には成長しすぎて、その教育を受けられなかったのもそれである」、というのは、明治の新時代の教育という意味でありますけれども、私はこれはやっぱり大槻文彦にとっては非常に痛感されたことだったんでしょうけれども、それじゃ明治以後の新しい教育というものはそんなに良かったのかという

と、これはまた、現代の教育がその末端にあるわけですけど、そこを見れば必ずしもそうは言えないですね。

「専門の学をしなかったのもそれである。」自分は専門の学を一つもしなかった。それが残念だと。本当に残念がっているんですね。

「専門の学をしなかったのは、一生の損であった。今さら取り返しがつかぬ。何学問でも専門でなければ造詣せぬ」、造詣せぬというのは、造詣が深くならないということですね。「——自分の失敗を証拠として、青年諸君に忠告をする。」忠告をすると言ったけれども、専門の学をせよと教え込もうとした方針は私にそれだけではうまくなかったと思います。専門の学問もやらなければいけないけれども、大槻文彦のような雑学を重んじるということは、本当に大事だと思っています。

「私はもはや六十三才。これまでに是れぞといって何一つ目ぼしい仕事を仕でかしたことはない。何につけても思いだすのは父である」。父は大槻磐溪で、仙台藩の儒者、儒学をもって仙台藩

に仕えた人で、しかもひじょうに重要な政策決定にまで参(まゐ)り込んだ人で、明治維新の、薩長がいわゆる政權をとった時に仙台藩は幕府側でしたから、藩が大変だったんです。それで、磐溪も実は殺される、斬罪に処される寸前に、息子文彦は東京にいたんですけれども、夜を日について早籠(はやくご)で仙台に帰って「父上の代わりに私を斬罪に処して下さい」と言ったんですね。それで、父磐溪も息子文彦も幸いにも助かった。そういうことがあります。激動の時代を生きだした親子ですね。

「何一つ目ぼしい仕事を仕でかしたことはない。何につけても思い出すのは父である。父に鞆丸をくれてやったから志を立てると言われた。その鞆丸に対して恥じる」この辺はやっぱり明治の人ですね。「まだまだ何かせねばならぬと心配している。父の遺著は残らず出版した」——この頃の大槻家は、出版社を通して出版していません。全部自分の家で、いわゆる私家版です。私家版でものすごく立派な本をたくさん出しました。大槻磐水も磐溪もそうやって世のなかに知られたんで

す。家族全体が自分たちで本にして世のなかの人に知らしめた。そういうことで、何から何までそういう自力でやるということを徹底した家だったんです。

「二十年祭も三十年祭も兄弟で執り行ったが、五十年祭までは生きられぬと諦(あきら)めている。今の気風について意見を言えとおっしゃるか。今の世は駄目です」。

新聞記者が「現代のことについて何かご意見はありませんか」と尋ねたら、言下に「今の世は駄目です」とおっしゃったんですね。時代が明治四十二年です。もしこれが、平成九年の現在だったらどう言ったんでしょう。おそらく、何も言うことないよ、と言ったに違いない。ここが大切なんですが、「昔の土風は」昔の侍の行動の仕方ということですね。「昔の土風は間違えば死ぬとあつたに、今は間違えば逃げるといふふうになっている」。これはかなりきついですね。今、現在にもびったりあてはまりますね。「死ぬと逃げるが分け目である。人は精神一つだ。世が開けるに付い



て好い事も起るが、悪い風にもなる。教育の任にある人などは深くこの辺を考えたいと思いがす。」——ここだけ「思います」になっていまして、なかなか面白い。これは長い自伝なんです。その一節です。新聞に連載されたその一節を、私は読む時に非常に感心して、特にこの部分が面白い。

いずれにしても、大槻家の周辺というのは、今、考えてみると遠い昔の人々というのじゃなくて、むしろ未来において私たちに随分教えてくれることのある家だというふうに思うんです。それで、今日、話のはじめに触れたわけです。

(二)

「いのちの言葉 ことばの命」。言葉というものは命である、ということを私は思っているんですけれども、これは、実際にどういうことかという、小さな子供に関しては非常にそれが分かることが多いと思います。たまたま私は、もう随分前になりますけれども、ある小学校の先生とか、

教育学をやっている大学の助教教授クラスの先生方とかと三、四人で何回も何回も座談会のような、実をいえばその方々が私を取り囲んで私に毎回毎回、何かを喋らせる会というのをやったことがあるんです。もう十数年前になりますけれども。その結果が一つの本になるくらいになって、それが「太郎次郎社」という出版社から出たことがあります。その本の名前は『日本語の豊かな使い手になるために』という私としては非常に恥ずかしいんですが、そういう題にしました。それが今年の夏にはまた文庫本で復刻されることになりました。

その本の中で、ある私のお相手の一人の方（教育学の先生です）が話されたことですが、非常に印象深かったことがあって、それがいまだに忘れられない。そのことをお話ししたいと思います。

その先生が、ある幼い子の教育相談をその両親から受けたんです。その子供が三才になってもしっかりも言葉を喋らない。別に障害があるわけじゃないんです。ただ、言葉にならないんです。あまりにも遅いということで、その子の親、特にお父

さんが心配して、その、矢吹先生という人ですけれども、相談されたんです。彼は教育学の先生ですが、実際にいろんなカウンセラーみたいなことをやっていますので、その相談を受けてからずっと観察をしていたんです。それで、気がついたことは、ご飯を子供にあげますね。子供にご飯を食べさせようと三時間ぐらいかかるんですが、飲み込めないんです。なぜ飲み込めないかというところを噛めないとペロペロと舐める形になります。舐めていつまでたっても飲み込まない。噛まないからなかなか減らないんですね。そして、その飲み込まないでペロペロやっているうちに口の中では柔らかいお餅みたいになっていると思うんです。やっとなお餅が、ツーツと入っていくと思うんですけれども、だいたい三時間ぐらいかかったと。相談を受けた彼は「変だ。これはおかしい」と思っているいろと突っ込んで考えて、家の事情も立ち入って聞くわけなんです。

その子は実は混血児だったんです。米兵が日本

に駐留していた頃の話です。そのお母さんが米兵の駐留している所を転々と動いていろいろと働いていた。つまり、そういう所のレストランか何かの所で働いていた女性だったらしいんですね。その間にできてしまった子供がその子だったんです。家庭の事情がそうでしたから、米軍基地のいろいろな所へ動いていきますから、それで、子供の保育所みたいな所へずっと預けては出掛けていくということでした。だから、母親との接触がほとんどないわけです。そのことがこの子供に非常に深い影響を与えた。

母親との接触がないために、三才になった子供は母親の胸に抱かれておっぱいを飲まされたことがなかった。赤ん坊というのはやはり、そういう経験がないと、かなり難しい問題があるわけです。そこで、矢吹先生は、お母さんに勧めたらしいんです。「もう三才になって大きくなっていくけれども、おっぱいをやるみたいな形に抱いてもらいなさい。そして、牛乳などをあなたが手に持って飲ませなさい」と。それをやったら、子供が夢中

になってしがみつくようにしてミルクを飲むんだそうです。喜んで子供がそれをやっているうちに、実に不思議なことに嘔むことができるようになったんです。何も教えないのにもかかわらず、母親が愛情をもって、自分の胸に抱いてやっているうちに、——自分のおっぱいはもう出まぜんけれども、その代わりに哺乳瓶を持ってやるとそれは夢中になって、喜んでしがみついているうちに与えられたものを嘔むことができるようになって、飲み込む、嚥下するようになったんです。それと同時に言葉をしゃべるようになった、というんです。

ですから、本当の意味で言葉というものは、人間の生きていく上での命の、様々な現象がありますけれども、言葉というものが一番に根本的で、食べるもの、食欲、それから母親に抱かれること、おっぱいをそこで吸わせてもらうこと、そういうことと言葉というのは完全に繋がっていると、矢吹先生はその観察の結果で確信したといっています。私も本当にそれはそうだなと思いましたが、子供というのは、そういう意味では大事な経過を

経て大きくなって行って、その経過の中に組み込まれて言葉というものの体験もあって、言葉を喋れないとか、喋れるということと、母親からの愛情とか、あるいはいろんな泣いたりする仕種によって示される愛情、そういうものが全部一致しているということが、そこではっきり示されている。大人になってしまつと、本当はよく分からなくなってくるけれども、子供というのは、そういう意味では正直に、人間の命の根本のあり方というのはどこにあるのか、ということを教えてくれているのだと思います。

飛躍しますけれども、私どもは日本は戦後になってから年齢の数え方が満年齢になりました。生まれてから一年たつてやっと一才になります。始めは〇才です。ところが小児科、病院で赤ちゃんを見る先生方、特にお母さんのお腹に宿ったばかりの頃からずっと見ている先生方にとっては、子供が生まれてくる瞬間にはもう完全にその児は一才なんです。そういう意味では満年齢はフィクションであつて、本当は数え年のほうが人間の実

態に近いのかもしれない、と私も思うんです。子供というのは、生まれてきた時に、初めて「生まれた」と普通は言いますけれども、それはそうじゃなくて、子供は宿つて二、三週間後には、本当の小さな子ども（胎児）がもう既にいろいろな反応をしているんです。そして、何か月間か後には母親とか父親がとても優しい言葉で赤ちゃんのことを話していたりすると、赤ん坊のほうはその声でするほうに寄っていくんだそうです。そういうことは小児科の先生の研究でハッキリしているんです。

ですから、胎教というのもまんざら嘘ではなくて、やっぱり美しい音楽なんかをしょっちゅう聞かせてやるとお腹の中で赤ちゃんがなるべくそっちのほうへ近づくといいんです。十月月たつて生まれてきた時には一才なんです。そういう意味でも、言葉というものがそんな子どもの成長過程と一致していくものですから、言葉が非常に大切だといつても、それを小学校に入るくらいの子どもに対して、言葉が大切だからとかいってやるとい

うことでは全く遅いわけです。生まれ落ちた時にもう既に子どもは母親の言葉を聞いて育っているのです。ですから、赤ちゃんがお腹の中にいる時に母親が相応むちやくちやな言葉使いであったり、あるいはしょっちゅう夫婦げんかをしたりという場合には、その影響があると思ってもいいのかもしれない。生まれ落ちた瞬間に人間になったわけではない。ずうっとお腹の中にいる時から、はっきりした人間がいるんだということ、そして頭脳にもちゃんと反応しているんだということです。優しい言葉にはちゃんと赤ん坊がそっちの方へ寄っていく。逆に、すごい怖いようなことがあると、ちょっと避けるというんです。

そうした意味では、言葉というのはいくらでもどこまでも遡ることができる。一世代だけではない、その世代を生み出した父親・母親の世代、そのまた父親母親の代と、ずっと繋がっているものなんです。繋がっているからこそ人間の文化に全体として一つのまとまりがあるんだと思います。このまとまりがなくて、前の世代がやったこ

とが全然意味がなければ、次の世代は勝手なことをしてきますね。これでは伝統と言われている繋がりのある世界が常にブツ、ブツと切れていってしまいます。そういう状態になり兼ねないような感じがしているのが、実は現在です。

今日、お話ししていることは、現在のことと関わりがあると思っただけで結構だと思います。それに関連して言えば、いまの学校教育では読み書きというものを非常に重んじますけれども、「読む」と「書く」だけではなくて、「話す」と「聞く」というのがあるわけです。話す、聞くというのは非常に重要なんですけれども、話す聞くよりは、読み書きの方が重視されているのが現在の教育のあり方です。これは、全く間違っているとは言いませんけれども、非常に難しい問題を自ら招いているのではないかと思うのです。話すこと、聞くことができないう子どもが今、大量に発生していて、話すときも片言みたいに喋って、それでツーカーでいってほしい、ということのようです。

そうしますと、それは同じ世代間でしか通じないんです。違う世代、父親母親の世代、あるいは少し上の姉の世代とさえも違って障壁ができる。自分の言っていることは全然分かってくれない、大人は何も分かっているんだ、という子どもを作っちゃうんですね。それは、話す聞くがちゃんとできないからです。無論、その子たちの責任が大きいんですけれども、そういう状況を生み出している世代、というのはその上の世代ですね、そこにも問題がある。だから社会全体の責任です。原因には、テレビジョンとかのマスコミニューケーション、それに読み物あるいは聞く物、見る物、そういうのが片言でも通用するような、片言のほうがカッコいいというような、何も本当は分かっているにせよ分かっていないような、分かり合えなような感じになっている今の日本の状況が問題なのです。いえ、日本だけではなくて、諸外国でも、特に文明国ではみんなその問題で悩んでいるんです。アメリカもものすごく悩んでいるし、フランスのように言葉について特にうるさい国でさ

えも、今は急激に変わってきています。それは、悪い方向に行っている、ひと言で言えばそうなっています。大きく根の深い問題なんです。結局、片言でもいいからパッパッと喋って、スピードがあって、理解ではなく反応があればいい。そういう言葉づかいが氾濫しているということです。学校教育では、話す聞くがあって、その上で読むと書くがくるのが正しいあり方というか、普通のあり方なんです。

ところが、今の教育では読み書きを重んじますけれども、話す、聞くというのは先生方もあまり注意していないとしか思えないような事例がいっぱいありますね。

先生が子どもたちに、毎日毎日教室で、小学校は特に教科書などで使われている物を朗読させるということが絶対必要だと私は思うんですけれども、それをやると嫌うんです。子どもは嫌うし、先生方も面倒くさいからやらないうような、そういう場合も結構あるんじゃないかと思うんです。私の推測が誤っていれば幸いです。とにかく、声を

出して本を読むということをしなくなった。もう何十年も前から日本の教育はそうなってきたんです。昔はもう、声を上げて、大声で一つの教室が同じものを読むということをやったんですけれども、そういうことをやるのは非民主的だとも思っているんですかね。民主主義というのはいい面と悪い面とがあって、今の日本では悪い面の方が多いような気がしますけど、特に、何でもみんなに一齐にやらせるといふようなことは権威主義的だとか、そういう考え方で反対する。みんなにやりたいようにやらせるといふふうになって、今頃になってすごい復讐を受けているわけです。神戸の事件なんていうのは、あれは子どもの大人に対する完全に復讐ですね。そういうことが起きるのは、周りを見れば予見できるはずなんですけれども、実際の教育の現場では予見はしないんです。それで、起きた結果によって突然の衝撃を受ける。だけでも、衝撃を受けてもどうしていいか分からないから、やがてあれもすぐに忘れられてしまうでしょう。そうになっていくと思います。

(三) さて、「折々のうた」で取り上げた詩歌について幾つか取り上げて、と思うわけですけれども、日本の詩歌というもののなかには短歌と俳句と、そして現代詩の三つがいちおう代表的な形ですね。私はその三つのジャンルだけではなくて、さらに中世・近世の歌謡、いわゆる流行歌ですね。あるいは漢詩の一節とか現代詩の一節とかいうものを取り上げています。短い言葉というものには、本当にすごい力があるということをいろいろな場合に私は感じていきます。感じているといふよりは、絶えずそれに迫られているんです。その中のいいものを、なるべく可能な限り選ぼうと思っっている仕事で、現在の「朝日新聞」の連載なんです。

たとえば、どんなものが身近にあるのかというと、特に病気とか死とかいふ人間のあまり有り難くないような面ですね。そういう面で病に伏している人とか、あるいは突然病の宣告を受けたとい

う人の場合、その瞬間に長い長い自分の人生の間が、パッと浸み込むというか、自分の心の中に迫ってくる場合がありますね。そういう時に作られた詩歌というものは、非常に感動的なものが多いんですね。



ここに紹介します上田三四二^{みよじ}という、ちょうど昭和が平成に変わる瞬間の、その日ぐらいに亡くなられた歌人がいます。歌人であり文芸評論家でもありました。いい仕事をなさったんですけども、癌で亡くなりました。その上田三四二氏は、二度目の癌で亡くなったんです。最初に癌の宣告を受けた時の詩があります。このひとは、実はお医者さんでして、結核の専門医で、絶えず死んでいく患者たちを自分が診てきた人です。それが突然、どうも変だというので病院へ行って精密検査してもらったら、自分自身が癌だったんです。結腸癌でかなりつらい病気だと思っんですけども、手術をして、それが一大転機になって、その後二十年ぐらい生きていたんです。その間に、非常にいい歌を作っています。歌が奥が深くなくて更に良くなったんですね。それ以前からいい歌人ではあったけれども、やっぱり病気というものが人をそれだけ深める、そういう経験をなさった人です。

結腸癌ということ、医者同志ですから患者に

対して言うわけです。普通だったら隠すかもしれない。この場合、上田さんに対して主治医が「あなたは実は結腸癌です」と言ったんです。やっぱり医者でもそういうことを言われるとすごい衝撃ですよ。大変だったわけです。その時に、癌の宣告を受けてから作った一連の歌があったわけです。その中の一つにこういうのがあります。

たすからぬ病と知りしひと夜経て
われよりも妻の十年老いたり

癌の宣告を受けてから家に帰って、奥さんに実は——と言ったんですね。その間に、自分は心の準備ができていたんです。ショックだったけれども、仕様がな。覚悟をして、これから手術をして、と思っていたわけです。奥さんは、その時に初めて聞かされた。翌朝見たら妻が十年も急に老けちゃった。十年も年を取ったような感じになりました。この歌はやっばりすごい、いい歌ですね。つまり、短い歌の中に「十年」という年月をパッと

詠み込んで、実際にそうだと思わせるくらいの、重大な時点における詩ですから「十年老いたり」というのは、本当にしみじみと、実感をもって詠まれているという感じが分かります。

こういう詩が短詩形文学というものの一つの非常に重要な存在理由なんです。こういう詩がなければ、この時の経験はそのまま水のように流れてしまった。だけれど、上田三四二氏がこういう詩を詠んでおいてくれたから、この時の経験というのは歌集の中に残って、それをまた私が「折々のうた」なんかで取り上げれば大勢の人の経験になるわけです。

短い詩だからこそ逆にそれが可能なわけです。長い、たとえばこれが三〇行、五〇行、あるいは一〇〇行ぐらいの詩の中で、このような事が書かれていたら、おそらく「あ、そう」ということになっちゃうでしょう。短いからこそ衝撃的なことだけがパッと出る。それが非常に確かな腕、この上手な歌人が確かな腕でそれを詠んでいる。下の句へいって急に突然、実情が明らかになりますね。

上の「たすからぬ 病と知りしひと夜経て」というまでは、何ということはない。「あ、そう。それで？」となります。ところがその後「われよりも妻の十年老いたり」というと、突然ガラッと場面が変わるわけです。上の句のほうでは、自分一人の時は助からぬ病と知った人がいたと、それだけです。ところが自分の相手方、相手になっていく人がいた。それが妻だった。妻は翌日見たら十年も年とっていたということになれば、短い詩だけでも実は内部で二つの構造的な要素があるわけです。夫の視点から見ているものと、それを聞いて突然大ショックを受けた妻がもう一方にいて、その二人の命がガチャンとここでぶつかっているわけです。それでも、詩としては五七七七七の三十一文字に過ぎないんです。ですから、内容によって、詩というものはこれだけ深くなる。深くすることができるといふことですね。

このことは、他の短い詩にもいえます。川崎洋君という僕の友人がいます。彼の詩で、わずかに六行の、非常に短いこういう詩があります。

犬も
馬も
夢をみるらしい
動物たちの恐ろしい夢の中に
人間がいませんように

犬も馬も夢を見るらしい。動物たちの恐ろしい夢の中に人間がいませんように——。たぶん、いや、確かに人間がいるんですね。現在、動物たちの夢の中には怖い怖い存在として人間が、一番巨大な存在にいると思うんです。それを、わざわざ人間がいまぜんように、と言っているというところで、これは非常に切実な祈りというものを表していると思います。こういう詩もあります。短い詩ですね。短歌よりもちょっと長くらしいです。

他にも、あと一、二の詩や俳句をご紹介します。一つは、冬道麻子さん（本名かどうかは不詳、現在四十年代の方だと思います）、その方の詩があります。はじめ

に詩を読みます。読んだだけでは分からないと思いますすけれども――。

握力計の知らざるちから身にありて
4 Bの鉛筆に文字現わるる

実は、握力計を握っても、いくら握っても、全然動かないのです。だけれども、握力計では測ることのできない、握力計が知っていない力、それが自分の身体の中にある、4 Bの鉛筆に、4 Bというのはいくらも鉛筆ですね。4 Bの鉛筆を握ると段々文字になって、表紙の上に現れてくる。というのは、4 Bの鉛筆を彼女が握って一生懸命に書く。握力計にもでないんですから、本当は字も書けないはずなんです。それが文字になって出てくるという意味ですね。

この方は、実は非常に元気な少女期を過ごしたところ。ところが不幸にして少女期が終わる頃に突然病気になる。それが難病の筋ジストロフィーです。筋ジストロフィー患者というのは、本当に筋肉がだんだん弱

っていく全く気の毒な病気です。身体も動かなくなる。そういう病気なんですけれども、その闘病を今、ずっと続けていらっしやいます。私はその方のお姉さんだったか、お友だちだったかから手紙つきでこの方の歌集をもらったんです。読んでいて非常に打たれて、「折々のうた」で取り上げました。それから後、冬道さんから手紙が来て、手紙はしっかりした字ですから、お母さんが書いてるのかもしれない。お母さんが付添でいるようです。その冬道さんが、ある時に高安国世という歌人（京都大学の教授で、ドイツの二十世紀を代表する詩人リルケの研究者として著名、翻訳もずいぶんしている）この高安国世は同時にアララギ派の歌人でした。ただし、この人がアララギ派？というくらいに、いわゆるアララギ派の歌とはずいぶん違う、頭のなかで観念や想像力もつかって、活躍していた人です。この方も何年も前に亡くなりましたけれども、その高安国世さんの作った『塔』という雑誌が京都にありまして（短歌雑誌です）、その雑誌にまだ高安さんが存命中にある日、ふと出会って、冬道さんは会員

にしてもらったんです。会員になって、そこで歌をずうっと発表してきたんです。発表し始めたら、なかなかいい歌を作る。それでみんなに励まされるから、嬉しくて一生懸命歌を作る。歌を作るという一心で書くと、手に持てないはずの、字なんて書けないはずの手が実際に字を書いてしまう――という歌です。これはやっぱり命ですね。本当に詩・歌というものが命になる。

言葉というのは命になる。命になるということをたった一つ証明してくれるものは、彼女の場合には本当に自分の作る歌が、実際に書いているのは弱々しい字かもしれないけれども書いて、三十一文字の歌になっているということ。ですから、そういう意味では、短詩形というのは人が生きていくという、命を証明する非常に大事なものだと思えます。

それは、たとえば正岡子規という、明治の短歌・俳句の、新しい短詩文学の創始者――子規は三十五才で亡くなるまで、脊椎カリエスで、しまいは背中に穴があいて、膿が溜まった。そういう状

態で三十五才まで生きて、しかし仕事は、普通の体力のある人間の五倍か十倍の、量だけではなくて、質は全く比較のできないくらい、いい仕事をした人です。この子規は晩年、毎日毎日、「病牀六尺」というのを「日本」という彼の所属していた新聞に死ぬまで連載していました。それに記事が出ていないと一日中、死んだようになって、つまり、書いたにもかかわらず他のニュースがいっぱいあって飛んじゃうと、すごく落胆して、しかし翌日また、一生懸命書いている。だから、書くことが本当に命だった。この正岡子規の、『病牀六尺』を読んでおられない方は、ぜひ、お読みになったらいいと思いますけど、それにすごくいい言葉がいっぱいあります。その一つは、第二十一章だったと思いますけれども、こんな意味のことです。短いです。だいたい彼の主なものは短い。なぜなら病苦に耐えかねて、とても書いていられないんです。その言葉です。

余は今まで禅宗のいはゆる悟りといふ事を

誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。(明治三十五年六月二日)

と書いて居るんです。彼は、実感としてそれを思つたんですね。生きていられるということ、これほど大切に思つて生きてきた人は、少ないと思います。みんなそう思つて居るんですけれども、正岡子規の場合にはそれを書いた。書いたということにおいて、非常に大事なことを、後世の我々に書き残してくれた。悟りというものは、いかなる場合にも平然と生きて居ることであつた、ということを見つけた。それは、本当にすごいことだと思います。

もう一つ、どうしても読んでおきたいものがあります。それは現代俳句です。俳句で折笠美秋という人がいました。この方は私よりもちょっと年下だったんですが、六、七年くらい前に亡くなりました。亡くなったのは、この人もすごい難病で、

とにかく、よくあれで生きていられたと思うくらの状態、俳句を作つて死んだんです。この人の場合は、病気が、前に詠んだ冬道麻子さんと似たようなものですけれども、筋肉が萎縮(しやく)しちゃうんです。この折笠さんの場合には、だんだん筋肉が固くなって身体が全く動かない。彼はそういう状態で全身動かなくて、口がきけなくなって、目と耳、聞くことはできたんです。それで、奥さんが本当に献身的に尽くした。

彼の目の前で五十音、へあいうえおをたぶん示したと思うんです。彼が目で「あ」っていったら、「あ」をジッと見るんです)そうしたら、奥さんが「あ」と書く。それが「お」という所をジッと見ていると、「お」だなど、やつて作つた俳句がかなりたくさんあるんです。死ぬ前に何年も作りました。一冊の句集を出して、俳句の重要な賞をもらいました。その俳句というのは全部というほど奥さんに対する愛情を詠っている句であるか、でなければ奥さんを讃えている句とかが多いんです。それは結局、周囲には奥さんだけしかいない

状態なので、そういう主題になるのは当然ですけれども、その人の句の一つで、こういうのがあります。

微笑^{ほほえみ}が妻の慟哭^{どうこく} 雪しんしん

というんです。妻の慟哭、慟哭というのは人がワァーッと泣く。身体を揺すつて泣くあの慟哭です。微笑というのは、奥さんは絶えず微笑を病人の前で絶やさないうです。絶対に嫌な顔をしな。微笑んでいる。その奥さんの微笑みを見ながら彼は、あの微笑みは、実は妻の耐えられなくて発している慟哭なんだ、とそう見ているわけです。そして「雪しんしん」、つまり病室の外には雪がしんしんと降っている。そういう状態で微笑んでいる妻が、実は全身で慟哭し、声を忍んで泣いているんだという句です。これもすごい句です。

短い句の持っている力というものをいうならば、死んでいく人とか、あるいは自分が病気になるって困っている人とか、そういう人の作品の中に

命の炎というか、集中して出ている、青い炎を出している句がありますね。この折笠さんの句なんか明らかにそうです。同時に、微笑み、微笑という笑いと、慟哭というものがバツと繋がった。あの微笑みは実は妻の慟哭なんだと見た瞬間に、自分の発見に涙したと思うんですけれども、そういう意味でいうと、文章は長くある必要がないということですね。もちろん長い場合も必要ですけれども、長くある必要はない。実際に私はそう確信しています。私は毎朝、「折々のうた」というのを書いていますけれども、あれは一八〇字なんです。一八〇字ということは二〇〇字詰原稿用紙で一行おしまいが余る、それでも書きたいことは書けるんです。言葉というものは本当に大事な大事な命だとそう思います。

〔平成九年七月五日、一関文化センターにおける大岡信先生の講演を小誌編集子が成稿にした。〕

「中尊寺ハス」の開花まで

長島時子

(司会) 昭和二十五年に、中尊寺におきましては藤原四代公の御遺体学術調査が行われました。その際に、生物学の大賀一郎博士がそれぞれの棺の中から数種類の種子を採取して調査されました。四代泰衡公の首桶からは、数十粒のハスの実が発見されております。

大賀博士といえ、その二年後、昭和二十七年に、二千年前のハスの実を開花させまして、当時の暗い世相に明るい話題を提供されました。「ハス博士」として全国的に知られたわけです。大賀先生は昭和四十年に亡くなりましたが、その大賀先生のもとで助手として長らく研究されております。

したのが、長島時子先生です。

長島先生は、神奈川県伊勢原市の、恵泉女学園短期大学教授で、園芸生活科を指導しておられます。金色堂の御棺のなかにあったハスの種子がなんとか発芽、開花しないものだろうか――、と申しますよりは、なんとか開花させていたきたいと、先年中尊寺からお願ひ致しました。それが今年、七月二十九日に、発芽より五年の歳月がかりでしたが、先生の丹精により、ようやく開花したような次第です。

今日は、その「中尊寺ハス」の開花に至るまでのお話をお願いいたします。

皆さまは多分、新聞やテレビで中尊寺ハスの開花についてはご存じのことと思います。そのお話に入ります前に、わたしが勤めております恵泉女学園短期大学園芸生活科というところが、どういう所か宣伝を兼ねて説明してください、と打合せの際に言われておりますので、少し説明させていただきます。

ただきまして、それから本題に入りたいと思いません。

私どもの大学は、園芸を中心に行っております。よその大学ではちょっと考えられないような全寮制をとっております。ですから、どんなに家が近い方でも全て寮に入れます。二十四時間教育ということになります。午前中は講義が中心で、午後には実験実習、あるいはその他の情報科学といったものを取り入れてカリキュラムを組んでおります。それで、わざわざ他の大学を出たのに、恵泉短大の実習をどうしてもやりたいということで再入学して、寮に入って勉強するという方が、過去に何人もおられました。現在もそういう方がおります。

いま、園芸ブームと言われますね。しかし、ブームはブームであって、本当の園芸を知るといふ機会が少ないんですね。恵泉短大では、徹底した全寮制で学習する、それに刺激されて入ってくるという方もおられる。そのなかで、わたしは植物学、園芸を担当しております。園芸でも、特にハス(蓮

とラン(蘭)にテーマをもって研究を進めております。

それでは、はじめにハスの基本的なことについて説明したいと思います。ご存じのように、ハスの種は、非常に固い殻をもっております。そのため、土の中にありましても、二千年でも三千年でも生きている場合があります。なぜ、そんなに長く生きていられるのかと申しますと、外側の種皮(普通、種皮といいますが、厳密には果皮です)が、その細胞が非常に厚い壁で、びっしりと詰まっているわけですね。ですから、ある条件のもとに置きますと、そのまま休眠しているわけです。眠った状態になっていきます。それで、いつまでも生きていられるというわけです。種が、そういう特殊な形・組織になっています。

先日開花いたしました中尊寺ハスも、御棺の中で、非常にいい、安定した状態にあったわけですね。もしこれが、条件が悪ければ発芽しません。御棺の中の条件が非常に良かった。それが、発芽した第一の要因であると思われまます。

それでは、スライドで（その主なものを写真版掲載）、中尊寺ハスの発芽から開花までを説明させていただきませう。

〔巻頭グラビア参照〕

（写真1）これが、中尊寺ハスの種子です。

中尊寺から、はじめ府中市役所公園緑地課の植物園の方に五粒の種子が依頼されたようですが、わたくしが大賀先生と一緒に研究させてほしいというたという経緯から、ぜひ発芽させてほしいというご要請とその種子が私のところにまわってきたわけです。けれども、五粒のうち二粒だけお預かりしました。そして、この種子を見ましたとき、「あ、これは生きている」と直感しました。右側の種子が、重さが八六〇mg、左側の種子が七二〇mgでした。ずいぶん違いますね。右は生きているけれども、左は、どうかな？と心配しながらスタートしたわけです。

ハスの実（種子）は、そのままでは絶対に発芽いたしません。先ほどお話ししましたように、固い殻

でその中に密封された状態ですから、そのままでは一〇〇年たっても二〇〇年たっても発芽しません。空気と水が入る状態にしてあげなければなりません。それで、普通は種の下方に花鉢などで切り込みを入れて、空気と水が入るようにするのです。

ハスの実生のスタートです。八六〇mgの方は水に沈みますが、七二〇mgの方は水に浮いています。この段階で、七二〇mgの方はどうも怪しい、ということになりました。ハスは、水に入れて四日目で発芽しますが、水に浮いた方は発芽しませんでした。発芽しますと、先の部分が緑色の葉になります。一般の植物は、種を蒔きますと、まず根が出るんですが、ハスなどの水生植物は、まず葉や芽が出て、その後根が出るわけです。

（写真2）これは播種から、二十日ほど経ったところ（93年6月10日）。葉が展開し、根が伸びております。このように、葉が四枚展開したところで、このままにしておきますと腐ってしまいま

すので、普通の栽培状態にします。

ハスをあまり大きくない鉢に植えます。土と水を入れます。このとき注意しなければならぬのは、肥料を入れないことです。肥料を入れると、肥料負けして腐ってしまいます。ですから、普通の水田の土、あるいは畑の土をそのまま使います。そして、ある程度大きくなったものを、今度は大きな鉢に移しまして、ここではじめて少し肥料を入れます。

鉢のところ、「中尊寺蓮」と名札に書いて標示したんですが、よく考えますと、これは非常に危険だったんです。盗まれたらおしまいです。これ、一本しかないのですから。秘密にやっています。翌年からは、危険ですから「中」とだけ記号で書いておきました。こうすれば見た人が何のことなのかわからない、大・中・小の中と違いますから。一年目の秋には、葉もだいぶ大きくなってまいりました。

翌年の四月、根を掘り上げましたところ、三つ

の蓮根ができておりました。それを見てはじめて大丈夫だと思ったのです。このハスはいずれ咲くだろう、と。「小」と書いてあるのは、小さい蓮根も植えたという標示です。

最初に出た葉の色が赤かったんです。色素が出てくるわけですね。それで、中尊寺ハスは紅蓮だろう、ピンク系だということがわかるわけです。二年目で、蓮根も大分大きくなりました。本当に上手なひとは、ここで花が咲くわけです。花が咲く条件は、まず肥料を適量に入れること。それから日当たりが十分にあること。水の温度が温かいこと。この三つの条件が必要なんです。わたしは、二年目はまだ無理だろうということで、三年目こそ咲かしてあげようと張り切っていたわけです。

（写真3）これが、三年目（95年）四月十日に掘り上げた蓮根です。前年と比べますと大変大きく立派になっています。この状態ですと、普通は花が咲くんです。わたしの場合は、肥料が少し足り

なかったことと、日当たりが不十分だったので、この年も咲きませんでした。

四年目、鉢をもっと大きいのにして植えてみました。ところが、ある朝行ってみますと、この畑の近辺の樹がかなりの時間、日陰を作っておりませんでした。午前一〇時ぐらいまで、日が当たらないのです。しまった、と思いました。もうこの時季に移すことはできませんでしたので、翌年こそ……と。移し替えることにいたしました。

そして五年目、今年です。蕾つぼみを見つけたとき、「蕾が出た」と大声で叫んでしまうほど(編者注：叫んでいたに違いない)、本当にうれしかった。すぐに写真を撮ったんですが、わたし興奮してしまっていたんですね。手振れしてしまって、これ、ピン트가ぼけてしまいました。

(写真4)は、少し落ちついてから撮りましたから、ピントも合っております。このように蕾が丸いんですね。古代ハスの蕾は細長いんですが、このハスは、蕾も丸いから花弁も丸いのではない

か、とはじめ思いました。ところが、そのうち段々と蕾が細長くなってまいりました。二千年ハスのように細長い花弁になるかもしれないと、非常に期待したのです。これは、開花二日前の蕾です。蕾がピンクに色づき、きれいないい色になってきて、感激いたしました。

七月二十九日、開花第一日目です。第一日目というのは、ほんの少ししか開かないのです。大賀博士はこれを「徳利型」と名付けましたが、徳利の口ほどにしか咲かないんです。花を上からよく見ますと、黄色い雌しべの粒々が出ています。この数が、種の数なんです。ハスの場合は、花が咲いたときに種の数が決まるんです。それ以上にも、それ以下にもなりません。

ハスは、朝早く咲きまして、お昼ごろからゆっくりと萎みます。これを、三日繰り返し、四目に開いてそのまま散ってしまいます。

(写真5)は、二日目の満開の写真です(7月30日AM7:25)。花の直径は二三cm、かなり大きな立派

な花です。

この前日に、「ハスの花が咲きましたよ」って、中尊寺さんに第一報を入れたんです。非常に喜ば



れました。ただし、ハスは午後には萎んでしまいます、と申し上げたんですが、とにかく直に見なければと、執事長さんはじめ三名の方がすぐに吹っ飛んでこられました。そして、開花二日目のこの日は朝早くから、沢山写真を撮ってらしたから開花したハスのいい写真がお寺さんの方にいっぱいあると思います。それで早速、テレホンカードや絵はがきなども作られたようですが、ハスは二日目が一番きれいなんです。

ハスの花は、普通四日目の昼までには散ってしまふんです。ところが、それが散らないで萎み始めたんです。わたしは本当にびっくりしました。そして翌朝(五日目)行ってみますと、全て散っていました。ハスの花が、四日目に萎んで五日目の朝に散るなどということは、わたしの経験では初めてです。見たことも聞いたこともありません。

わたしは、これで非常に感激いたしました。泰衡公は悲劇の人でした。その泰衡公の棺にこのハスの実はあったわけです。ですから、泰衡公は非

常に喜ばれたと思います。この世に出てきて、ハスが咲いてくれたと。泰衡公が、自分ももっと、何日でも咲いていたいんだというような気持ちがかちらに伝わってきました。心が伝わってくるような、何かジーンときたんですね。すごく感激したんです。わあ、これはすごいことだと思いました。泰衡公の心が、ハスに入っていたということなんです。そして、五日目の朝、ハスの花はもっと咲いてほしいのに、止むなく散ったのです。

本日、そのハスの種を持ってまいりました。実は、二日目の夜、伊勢原の方で雨が降ってしまいました。それで、雌しべの数だけ種ができなかった。花粉が水で流されたんですね。はじめ三つあったんですがその後さらに一つ落ちまして、今回は二つしか種ができませんでした。日中、圃場にはだれもおりませんから、だれか入ってきて採られでもしたら大変ですから、熟していることがわかりました段階で、茎を切りまして部屋で乾燥させ、それを今日ここに持ってきております。最初

に咲いた貴重なハスの実ということになります。

わたしが感激したのは、芽が出たときよりも蕾がでたときの方がうれしかったです。これが、本当に咲いてくれないと困る。ハスの蕾というのは、ちょっとしたこと枯れてしまうんです。「枯れちゃ駄目よ、咲いてね、咲いてね」って。「泰衡公が待っているんだから、頑張っってね」って励ましたんです。そうしたらグングン伸びまして、本当ならあと四五日かかるんですが、早く咲きました。ということは、早く咲いてあげようっていう気持ち、ハスに伝わってきたんじゃないでしょうか。ものすごく感激しましたよ。毎日観察しているんですが、あんなに急激に育つハスというのは、見たことがないんです。これは、なにか魂が入っているナっていうふうな気がいたしました。本当にもう、なんていうのか、ハスに自分も励まされ、ハスもわたしが励ましたっていうような、そういう感じになりました。

もう、種を採りまして、間もなく冬に向かいま

すから葉も枯れてきます。ですから葉も全部切ってしまう。そして、水を入れて土の温度が変わらないようにして冬を越します。そして、来年の四月に、蓮根を掘り起こして、こちらの、中尊寺の方に分けたと思っております。中尊寺さんで咲くというのが、本当は最高なんです。みなさんも、それを期待していらっしやることだと思います。このハスを「泰衡ハス」にするか「中尊寺ハス」にするかということですが、やはり「中尊寺ハス」の方がいいと思ってお話したところ、貫首さまもそのようにお考えのようですので、「中尊寺ハス」と名付けることになっております。

(質問に答えて)

* 古代ハスというのは、花卉が現在のハスよりも細長いんです。蕾が長い。中尊寺ハスははじめ少し丸かったんですが、成長するにしたがって段々長くなり、花が咲くと細長かった。これは、古代ハスの特徴です。

* 古代ハスというのは、だいたい千年以上のものをいいます。中尊寺ハスの場合は、泰衡公

のお首桶から出てきたわけですから、年代がはっきりしているわけで、まあ古代ハスに準ずるものと見なされるでしょう。

* 花卉は一八枚ありました。品種は、和蓮に非常によく似ています。

(貫首より)

本当にありがとうございます。自分が蕾になったような思いで育成なすったというお話でございました。念ずれば花開くという、坂村真民さんの詩がございしますが、その通りでございます。祈るような思いで、花開くまで御丹精いただいた長島先生のお陰でございます。先生の慈しみの御努力と園芸科学の知識に対して、心から感謝申し上げる次第であります。どれほどか、亡き大賀先生もお喜びであったろう、さらにそれにも増して、泰衡公がどれほどお喜びかと、わたしどもも深く感激しているわけでございます。金色堂前に燦然と花開く日がくることを、楽しみにしております。

新讚衡蔵(宝物館) 新築工事地鎮式に当たって

貫首 千田 孝信

本日は、年度末のご多忙の折にも拘わらず、岩手県一関地方振興局長殿・平泉町長殿をはじめ各界の来賓多数のご参列をいただき、建設委員の諸先生、設計監督並びに施工関係者のご列席のもと、如法莊嚴の裡（まにまに）に魔事なく、「中尊寺新収蔵庫新築工事の地鎮式」を営むことができました。先ずもって心から御礼申し上げます。

ご承知の通り、現収蔵庫「讚衡蔵」は、昭和二十六年制定の文化財保護法による戦後初めての国庫補助事業として、昭和三十年三月に竣工いたしました。爾來四十有余年、三千点に余る国宝・重要文化財を保存するとともに、広く参詣者に公開展示して、わが国平安仏教美術文化の精華である藤原四衡公の偉業をひたすら顕彰してまいりました。でございます。しかしながら、年を経るごとに構造物自体に疲労が確認され、収蔵文化財への影響も懸念されるなど、

耐用の限界に近づいてまいりました。

わたくしども一山は、当時の関係者各位のご努力に深く感謝を捧げつつ、今後の文化財保存策に向かって、新たな対応を考慮する必要が生じたわけであり。まさに二十一世紀を迎える今、時代に即応した収蔵庫の施設を完備して藤原氏の遺宝を後世に伝えることが、中尊寺として果たすべき重要な使命であり、藤原四衡公への報恩の浄業であると確信し、この事業の推進を決意した次第でございます。

平成五年以来、建設委員会委員長鈴木嘉吉先生をはじめ、文化庁その他専門の学者諸先生を建設委員として、そのご指導を仰ぎながら、一山内にも建設委員会を組織し、三十数回に及ぶ協議のなから基本構想の原案を作成し、株式会社三衡設計舎による設計、大手五社の公入札を経て、松井建設株式会社東北支店に落札、今回着工の運びとなったわけでございます。

建設内容の詳細は省きますが、鉄筋一階が収蔵庫、二階が公開展示室でございます。防災・耐震・空調の構造であることは勿論、大池周辺の景観の保持のため、外観には特に入念な配慮検討を加えました。公開展示室は、参道に

続く前庭から段差なしで入館でき、このフロアで全て拝観できるよう設計し、老若男女、身体の不自由な方も安心してご覧になれるような配慮をいたしました。

問題は、このような施設を境内のどこに建設できるかにございました。わたくしどもは境内をくまなく踏査し、慎重に検討を繰り返した結果、やはり先人の選んだ現讚衡蔵の建つ金色院境内において他になく、この地を建設地と定め、特別史跡地としての発掘調査も、岩手県文化課・平泉町教育委員会埋蔵文化センターの技師を煩わして、特に念を入れて、このほど、その全てを完了し、文化庁からの最終的許可もいただいた次第でございます。

地元の学者・研究者の方々からは、今回の立地が金色堂の東側の聖域であるという観点や、大池周辺の景観保持の見地から、学術的に貴重なご意見をいただきましたが、中尊寺の将来を思う有り難いご意見と承り、かたく胸に刻んでございます。

わたくしどもは、当該地の十二世紀に遡る遺跡の保存に入念に配慮しつつ、わが国の至宝である文化財の科学的保護と、公開展示の宗教的・文化的構想を綿密に練り上げな

がら、今後の建設事業を進めてまいれる所存でございます。

思えば、まさに、金色院は、金色堂の別当として、金色堂内の諸仏諸菩薩・藤原氏御尊骸を守り抜く使命を帯びた清僧の住する寺院であり、創建以来、特に近世以後、建物の移動改築など幾多の変遷はありましたが、つねに、中尊寺全山の東西南北、各谷々の中心に位する聖域でございました。

今回の事業は、この由緒ある金色院を復元しつつ、金色堂・経蔵をはじめ、山内諸堂に護持されてきた遺宝を、金色堂と一体のものとして保存しようとするものでございます。収蔵される国宝の多くが、金色堂の宝前仏具や荘嚴具であり、さらに、御遺体のお棺のなかに納められていた遺宝である事実を思うとき、むしろ金色堂に隣接する聖域に、金色堂と一体の御堂として保存することは、藤原四衡公のみこころに適うものであると信ずるからでございます。

拜む者、中尊寺貫首としては、収蔵されている文化財のすべては、清衡公初め歴代諸公の、熱い信仰、尊い作善の遺産であり、悉く礼拝讃仰の対象でございます。したがって、このたびの新収蔵庫は、わたくしども拜む者の心から

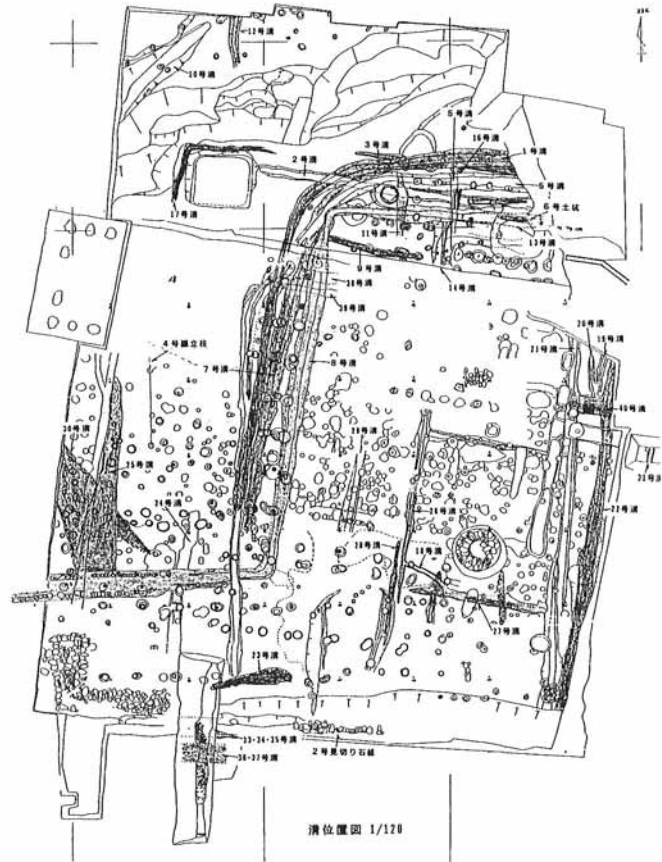
みれば、単なる収蔵庫・宝物館ではありません。新しい平成の仏堂を、精魂こめて建立し、これを藤原諸公のみたまに奉納する志、信念から発するものだと思います。

この新しい宝物館は、平成十二年春開館の予定でございます。あたかも慈覚大師の開山千五十年に相当いたします。藤原四衡公の作善の勝業を讃え、この遺宝を誤りなく後世に伝える使命を帯びたこの建設事業に、仏天の御加護と、遠近の皆様の深いご理解をお願い申し上げます、ご挨拶といたします。

付 新讚衡蔵の諸仏像・宝物展示フロアの平面図は大概下図の如くです。

当該地事前発掘調査の中間報告・図面は次頁に転載致しました。

なお、これらの中世の遺構・溝跡を破壊しないように基礎工事の設計を一部変更して保存策が講じられております。



当該地（金色院境内）発掘調査中間報告（概要）

平成 9.11.15

原因／新讚衡蔵建設
 地点／平泉町平泉字衣関78
 面積／掘削予定面積 1,000㎡
 主体／平泉町教育委員会・平泉町文化財センター

●検出遺構（中世遺構抄出）

- 掘立柱建物跡 4号 東西/2間 間隔/2.0m 南北/2間以上 間隔/2.5m 庇/無 傾き/N-89° -E 中世 南北棟、桁行き1間が長い

●遺構

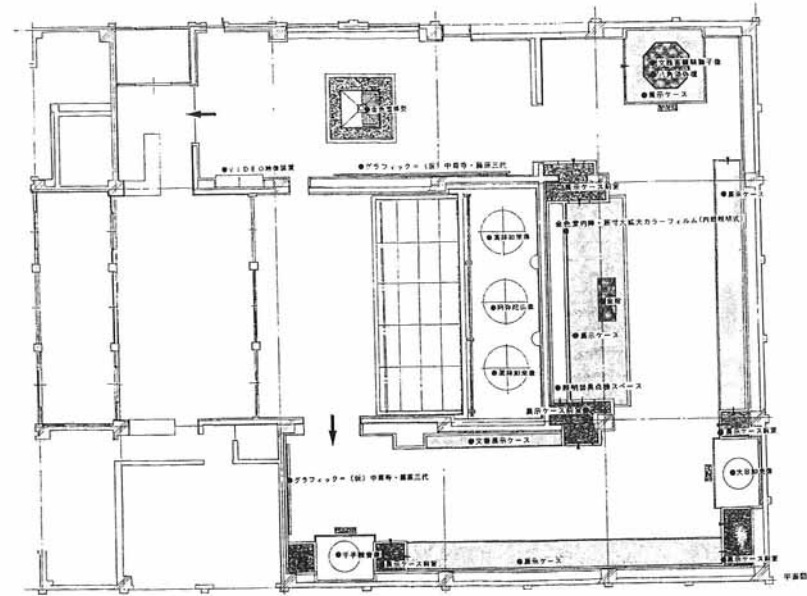
名称	方 向	断面形	遺 物	新 旧 関 係	時 期
8号	東西-南北-東西	逆台形	かわらけ・陶器片・北宋銭	16号溝8号土坑と同時期か	中世後～近世中
10号	北東-南西方向	逆台形			中世前
25号	南北	皿形		8号溝より古く、30号溝より新しい	中世
30号	北西-南東方向	逆台形		最も古い遺構	中世前
36号	東西	皿形			12世紀
37号	東西	皿形			12世紀

- 土 坑 6号 平面形/隅丸方形 東西/2.8m 南北/2.7m 深さ/1.6m 遺物/かわらけ、笹塔婆 12世紀後半

●2号見切り石組

調査区の南端から、東西方向に20個ほどの石が南側に面をそろえて検出された。近世中期以降の遺構であろう。南側は「古道」と呼ばれ、当遺構は道の北に造られた石垣と思われる。

(仮称)中尊寺新讚衡蔵（宝物館）新築工事平面概略図



季語に寄せて

不動堂月牒に添えて

〈第十一号〉五月



たすからぬ病と知りし ひと夜経て

われよりも妻の十年老いたり (上田三四二)

「五月二十一日以後」という題の連作。その日、「実は癌です」と知らされた人の、どこにももっていきようのない絶望と、しかしそれ以上に、たった一夜で十も年をとってしまったように見える妻への、万感の思いが――。

癌告知が、五月二十一日であったのは、ただ単なる事実であつたらう。が、これが新緑の眩しい季節だから、かえって、一人の人間の、個の存在を思わせるのであろうか。

五月は喪服の季節といへり

新緑の 駅舎出づればまぶしきまひる

(尾崎左永子)

「毎日」の短歌遊歩道に、小島ゆかりさんがこう書いている。

この歌には特別の思い入れがある。十二年前の五月、私は舅を見送って喪服の人となった。その前年の夏に長女が生まれてからの九カ月あまり、わたしは初めての育児と初めての看護に明け暮れていた。……下の世話まで委ねなければならなくなった舅の思い。赤子を置いて病院へ向かうときの悲しみと、舅を置いて病院から帰るときの悲しみ。痛いほどに眩しい初夏のひかりの中で、私は二つの悲しみを抱えて途方に暮れていた。……

生まれて生きて死ぬ、その重く淋しい人間の命の外側で、自然もまた年々の営為を繰り返す。自然の生命がもつとも鮮やかに息づく五月は、生と死の匂いがある……。

さあ、外の空気吸って、木陰で自然界のフィトンチッド(励起剤)を十分に肌に吸収させてください。

五月三十日夜

水沢市 熊谷勅子

前略 今日(五月三十日)祈禱月牒を戴きました。有りがとう御さいます。

五月二十一日は主人の命日でございます。

平成元年五月二十一日に癌で他界致しました。悲しい日々を過ごして居りました。姉に中尊寺のお不動様にお詣りする事を進められ、主人が亡くなった翌年からお詣り致して居ます。その間、姑も亡くなりましたので休んだ年も有りましたが。

「季語に寄せて」の五月二十一日と云う文字に吸い込まれる様な思いで読ませて戴きました。私も俳句を少々嗜んで居りますので季語の文章は興味深く拝読して居ります。

五月二十一日という偶然に思わずペンを取りました次第でございます。

どうぞ此れからも宜しくお守り下さいませ。心の拠所でございます。有りがとうございました。

〈第十二号〉六月



今年も長く、鬱陶しい梅雨でした。紙上俳壇には、

雨男 今日また雨の 牡丹寺

(「毎日」茅ヶ崎市・鈴木武彦)

紫陽花の 重さ抱へて 登校す

(「朝日」浜松市・戸塚晃彦)

などの句に共感をおぼえました。しかし、晴れても降っても「日々是れ好日」の気持ちでありたいものです。

鬱陶しいのは、雨よりも、列車内や古刹の参道などで所構わずの携帯電話です。

それぞれの孤独に 囁きかけるごとく

背丸め 携帯電話を愛撫す

〔朝日歌壇〕神戸市・沙羅みなみ

病めるのは少年だけでない、大人も地球も、常識社会も。こういう不透明で混沌としたときこそ、心を更にして「拝む」日常が大切です。

〈第十三号〉七月

朝草刈る 墓石よりも光る草を

(金子兜太)



草の伸びるのは、なんとも早く、春にお掃除したばかりな

のに、茫々です。

いや、お掃除したばかりではありません。それなりの月日が過ぎていく。

季が移ろい、日の経つのが早いのですね。

伸びて朝露に光っている草も、草を刈る人も、生きているわけです。

墓石は、少しも変わらない。

変わるもの（流行）と変わらないもの（不易）の対比であり、此の世と、あの世（他界）との暗示でしょうか。

お盆（盂蘭盆）までの日数が気になる季節です。

そして、「盂蘭盆」や「墓参」は、もう秋の季語です。

夫、子、母、ひとりひとりの戸を叩き

日暮れたり われは誰を尋ねしか

(米川千嘉子)

自らの生への問いかけでしょうか。そんなとき、

阿弥陀如来や、不動尊に詣でて、自己と向き合ってみるのもいいかもしれませんね。暑さと不景気に負けないで。

〈第十四号〉八月



とうとう、梅雨が明けないまま秋になってしまいました。テレビでは、中国や韓国の大洪水など、人間界を打ちめすような自然の猛威を見せつけられました。そして、景気の低迷。あちらではテロによる爆破、こちらでは砒素と、おぞましい事件が、否応なしに茶の間に飛び込んできます。

生死にかかはりあらぬことながら

この十日ほど心にかかる

(村松みね子／大正五)

大正四・五年といえば、当時、日本も中国における利権拡大をもくろんで世界大戦に参戦し、最後通牒を突きつけたりしておりました。内閣は長くて二年、ほとんど毎年のように替わっておりました。人も社会も、混乱していたので

しょう。

それから八〇年――、本質的に人間は進歩したとは、どうも言えないようですね。

弔電の まだまだ続く 暑さかな

〔朝日〕静岡市 村松史基

弔電は、遺族の方に宛てたもの。無理やり人に聞かせるものでも、まして、猛暑・酷寒苦痛を強いて聞かせるものではありません。せめて、心へのこる二・三通の紹介にとどめていいのでは――。特に、国会や県会議員何々先生とか、取引関係の会社・支店名の長ったらしい奉読など、参列された方々をさしおいて失礼でもありません。人間社会も、その程度の「改善」なら、やろうと思えばできるはずですよ。

〈第十五号〉九月



九月は、テレビも新聞も、「敬老」を語り「高齢化社会」を論ずるのが定番になっています。「人生いきいき」とか「生き甲斐」などの文字が目につきまます。しかし、である。

「生き甲斐」と不意に問われて息つめし

受講者五名の村の会場

〔朝日歌壇〕／福島県 佐藤伸

町や村、教育委員会あたりが講師を依頼してきて、人生とか生き甲斐とかを語らせる。それを拝聴、聞かされるわけです。いまさら、昨日までの生活も人生観も急にかわるわけではないことを、みな承知しながら耳を傾ける。

寝たきりになりたくはない死にたくもない

と言ふ母寝てばかりゐる

〔読売歌壇〕／岩手県 千葉英雄

こう、あからさまに言いながらも、母を見ている作者の優しい目を感じられる、と選者の評。たしかにそうですね。

長々とまづい道草食いすぎて

足腰痛む冥の入口 (曾宮一念)

作者九十六歳のとき。その年齢を聞けば、なるほど、とも思われるが、句には理屈があるもの。

急ぐな急ぐな黄泉はまだ日の盛り

〔朝日歌壇〕／下関市 清水元氏

いずれ、あちらからくるものだから、任せるしかないでしょう。

天高し人間といふ落し物

(上甲平谷)

「落し物」を拾ってもらおうと思えばいい。それで、拾ってくれた方が、届けてくれればなお有り難い。西方の浄土に届けてもらうためには、いま「南無阿弥陀仏」と称えておくのだそうです。

「もう寝よう 皆も寝よ」と目を閉じて

十五分後に父逝きましき

〔毎日歌壇〕／横浜市 江川孝雄氏

だれもが、そうありたいと思っている。

——今回は、秋のお彼岸にちなみまして、あの世とこの世の敷居を低くしてみました。

不動尊月牒^だを頂戴致し、私の所願成就を祈念して頂きまして誠にありがとうございます。

今回の季語によせては、自分の事の様で何回も拝読いたしました。これからもしまいこまな

〈第十六号〉十月



なぜか、売れる本がある。

『一億人のための 辞世の句』

蝸牛社という一人ではじめた小さな出版社、だからこういう企画もできたのかも知れないが、

『あなたの、辞世の句をお寄せください、選評を付して、一冊の本におさめます』と、大募集したところ、全国から次から次と投句があつて、無論、秀句もあればそうでない句もあるわけで、まさに玉石混淆^{ごうごう}のようだが、いまなお投句が後を絶たない盛況とか。

いで、折にふれて読みたいと思っております。

十月二日

福島市 加茂 喜代子

一冊でおさまらなくて、第二巻、第三巻と出版され、刷を重ねているのである。

本の帯に「忽ち^{なま}4刷 十代から九十代まで 厳肅にまたユーモラスに、へあなた^な」の辞世の句です」

あるいは、「これまでの人生をふりかえり、これから迎える死を見つめ直す」と。

いま、なぜ「辞世の句」なのだろうか。しかも、七十・八十代の方々がそろそろ辞世の句でも、そんな気分にならなるといふのなら、それもわからないではないが、収載された句は、四十代・五十代の方、いや二十代・三十代の人、中学生の句もある。そして、いま人生真っ只中の若い人の句に、いいがあるのである。

ちなみに、「柿くふも今年ばかりと思ひけり」この句は、かの正岡子規が三十五歳で亡くなる一年前の作、といった俳人の句と解説も折り込まれている。

・心^{こころ}太押されて出でし向い側 男 41歳
生きること晴れの日雨の日すべてマル 女 33歳
赤いリンゴ血と同じ色透きとおれ

——これは兵庫県の中学三年生の句。
帰るのはそこ晩秋の大きな木

——これは選者・坪内稔典氏の句である。

その選者が、第三巻では「これは並の下」「これは駄句」と、句毎に選評を付しているのだから、すごい。マスコミの反響も、すごかったようである。

とにかく、発行人の企画が物をいっている。

そこで是非、その発行人・荒木清氏の辞世の句を拝見したい、と思うのである。

* 栞「季語に寄せて」は、不動堂にご祈禱を申し込まれた方に、月牒に添えて隔月に発信しております。

研究／出版

平成9年5月『論集』創刊以降 11年3月(予定)まで

〔論文〕

- (1) 「平泉の吹き遺跡の一例」
『梵鐘』第6号 (9/5) 平泉町文化財センター 八重樫忠郎
- (2) 「中尊寺供養願文」の諸問題——吾妻鏡との整合性をめぐって
『宮城歴史科学研究』第43・44合併号(9/8) 中尊寺 菅野成寛
- (3) 「輸入陶磁器から見た平泉」
『貿易陶磁研究』第17号(9/9) 八重樫忠郎
- (4) 「荘園絵図にみる東国中世村落の成立過程と古代寺院」
『地方史・研究と方法の最前線』(雄山閣) 国学院大学 吉田敏弘
- (5) 「平泉古図研究ノート」
『綜芸文化』第1号(9/11) 平泉町教育委員会 千葉信胤
- (6) 「平泉町中尊寺の文永九年銘の板碑について」
『岩手考古学』第10号(10/3) 羽柴直人・千葉和弘
- (7) 「古語／漢籍」に聞く——ことばの時代考証
『山家学会紀要』創刊号(10/6) 中尊寺 佐々木邦世
- (8) 高野山金剛峯寺所蔵「国宝中尊寺経」について
『岩手の仏画Ⅰ』(県立博物館)(10/10) 高野山霊宝館 井筒信隆



(9) 国宝・紺紙金字一切経

『岩手の仏画Ⅰ』(同)

(10) 『奥州藤原氏と南都北嶺』

『大正大学論叢』(11/2)

中尊寺 破石澄元
中尊寺 佐々木邦世

〔近刊著書〕

・『平泉中尊寺』——金色堂と経の世界——

『歴史文化ライブラリー』吉川弘文館

(11/2)

佐々木邦世

〔報告書〕

・『中尊寺総合調査第2次遺構確認調査報告書』

(調査委員 代表 金丸義一)

〔講演〕

・「東北におけるフサタヌキモの現状と保全」

上野雄規

1997年度植物地理・分類学会賞受賞記念講演／仙台市自然観察センター

・「奥州・藤原三代の絹が語る」

帝京科学大学 中條利一郎

第12回「大学と科学」公開シンポジウム／有楽町朝日ホール

〔中尊寺総合調査報告会〕(7/4)

中尊寺

一字金輪仏坐像のX線調査結果(中間報告)

有賀祥隆

水野敬三郎



ゆかりの地探訪／ルポルタージュ

佐々木邦世

平成9年8月2・3日

(1) 宇都宮市 「樋爪俊衡・季衡五輪塔」

中尊寺月見坂下に弁慶の墓と伝称されている石塔がある。この石塔についてはじめて説明されたのは石田茂作氏であった。

今、地輪を欠くが、その火輪すなわち笠石を方形に作らず円形にしている点
は一般の五輪塔と甚だ趣を異にする。しかし、その姿は大和箸尾および宮古発
見の土塔に共通するところ多く、様式的に藤原時代末期のものとして大過無き
を思わしめる。

板橋源氏は、ここにあげた二例は土塔であるが、もう一つの例を紹介しておく、と
して、「樋爪俊衡および同季衡一族に関する墓と伝えられている」(宇都宮市文化財
要覧) 同市上河原町の三峰神社の二基の石塔について所見を述べ補説されている。

「尊卑分脈」によれば、俊衡は秀衡の舎弟なり、とある。平泉滅亡のあと、頼朝
に投降したが、「齡すでに六旬におよび、頭はまた繁霜を剃り、まことに老羸(ろうい)の容
貌」であったので、頼朝は憐愍に思い、御家人八田知家に身柄を預けた。

頼朝は鎌倉に帰還する途中、下野国宇都宮社に寄って戦勝報告をし、莊園を寄付



して「樋爪太郎俊衡法師の一族をもって、當社の職掌とした」と『吾妻鏡』は伝えられているのである。

八月二日、その俊衡・季衡の墓なる五輪塔を實見しておきたいものと、宇都宮に向かった。先に、栃木県立博物館の方に回って、折から開催中の「明治天皇御巡行展」を見学し、学芸員の千田孝明氏と共に、市街の三峰神社に向かった。炎暑のなか、町内会の有志の方々のお出迎えをいただいたのは恐縮した。

大通りの道端に小さな社があって、中に入ると、まさに円形の五輪塔が二基ある。保存会の方が、軸を払って見せてくださった。文化八年（一八一）に、眼前の五輪塔の形姿を、江戸の伸斎平時貞なる仁が模写し、傍らに『吾妻鏡』のこれに關係する記事を抜いて書いている。その絵と比見すれば、あるいは現在の二基の塔の位置が左右入れ代わっているのではないか、とも思われる。

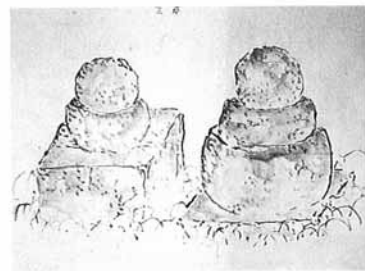
いずれにしても、石質は脆い。そして、よくこれまで保存されてきたものよと、この土地の方々の誠実な気風に頭のさがる思いであった。「ゆかりの地、平泉から此処に初めてお見えいただいた……」と挨拶されて、暑さに加えて身の恐縮に拭っても拭いても、しとど汗が流れる。燈明・読経して、しばらく目におさめ、写真にも撮り、おもむろに辞す。と、由緒ある舗にご案内されて一同ご接待にあずかった次第。冷たいビールの、旨さも格別であった。

(2) 茨城県金砂郷町西光院 薬師如来坐像（重文）

宇都宮から、車は国道123号を芳賀・茂木を過ぎて、293号に入り常陸太田市の手前、金砂郷町に着いた。「茨城県に奥州藤原清衡ゆかりの薬師像（重文）がありますよ。さすがいいですね」と、水戸の博物館の学芸員である黒沢君からかねて聞かされていた。私だけでなく、おそらく平泉のだれもまだ見ていないだろう。彼から送られてきた図録には、真言宗の西光院と記示されているが、寺堂は無く、当の薬師像はコンクリートの収蔵庫に保管されていて、鍵は町の教育委員会が管理しているとのことである。是非と金砂郷町教育委員会にお願いしてある。主事の矢部さんが案内してくれた。

その、豊かで安定した正面観。像容はまさに定朝様で、しかも、飛天光背から蓮華台座とも一式完形している。このような倉庫に閉じ込めておくのは何とも勿体ない。所伝は、清衡の娘でこの地の佐竹昌義に嫁した方によって、仁安年間（一一六六～六九）に創建された寺であったという。そして『新編常陸国誌』には、この寺の山号を田谷山医王寺と号す、と伝えている。そう、そこで即思いあわされるのが、『吾妻鏡』文治五年九月二十八日の条の、頼朝が帰途、達谷窟に立ち寄ったくだりである。それに「田谷窟」と記している。ここの田谷山も「たっこく」と読んだに違いない。寺は、達谷が西光寺でありこの田谷が西光院である。

常陸は、津軽「藤崎系図」によると、安倍氏につながってくるようである。



清貧の一徹居士 北嶺亮詮師——〔誌上鼎談〕

(佐々木高円 北嶺澄仁 編集・邦世)

(高) 北嶺老僧と言われて、まず思い起こされるのは、「寺の者が、御経を省略して何の得があるか」と、あの甲高い声でしかられたことです。

戦後、暫くして、御老僧方が本坊に出仕されるようになりました。北嶺老僧は、福島県の高木寺という寺を兼務されていて、時折こちらに戻られておったのですが、今日はいらっしゃると聞くと、本坊がいつもと違った、ピンとした雰囲気でしたね。

(邦) 明治十年、西南戦争があった年の生まれですから、昭和二十年終戦、その翌年は七十歳になります。そうそう、終戦の年のことですか、B29が中尊寺の上空を旋回したそうで、そのとき北嶺老僧が



白衣か禪か、とにかく白い布を振って、ここに弾を落としてはならんって叫んだそうです。そのお陰でしようか、B29は何もせず去ったそうで山内無事だった。あるいは、平泉駅に焼夷弾を落としたのがそれだったのかも。あの辺は、大変な空襲だったようです。

それから、北嶺老僧といえば、山王一実神道の一件というのを聞いたんですが、どういうことだったんですか。

(高) ……私ら、まだ若造で事態をよく理解できなかったんですが、山王講の折、晋山されて間もない蘭貫首が、壇に登って講師を勤められようとしたとき、北嶺老僧が異議を申された。「あなたは一実神道を伝授されてるのか？ 伝授されていないで登壇するのを認めるわけいかん」と言って、サッと立って老分室に戻ってしまわれた。

(邦) それで会場は、どうなりましたか？

(高) 導師は降ろすし、御自身は立ち去るで、結局、次騰の方が御導師を代動されてなんとか。

(澄) もともと山王講は、荒れることがあるとも言われていたし。

(邦) でも、山王講だけでなくて、施餓鬼法要でも、本壇を本尊

貞任の子高星は三歳で乳母に抱かれて北にのがれた。その高星の子が安藤太郎を名のり、その子の白鳥三郎高任は「津軽から大勢の士卒を率いて常陸に発向」と伝えられてきた。谷川健一著『日本の地名』（岩波新書）によれば、そもそも陸奥胆沢郡七郷の白河郷・下野郷・常石郷（ときわ）とある、常石郷は常陸国那賀郡常石郷からの移民であったらうと見て、つまり白鳥三郎高任は故地に帰ったものと考えているわけである。その論は、白鳥をキーワードにしている。そして「和名抄」に見える鹿島郡城鳥郷は現在の大洋村の字白鳥であると。

金砂郷町から那珂湊市をもう少し南に下ると旧白鳥村の大洋村に至る。その間に大洗がある。大洗の西福寺御住職は旧知の間である。ここまで来れば声を掛けないのも失礼になる。と、案の定、彼の計らいで、一同、大海の磯に望むホテルに宿すことができた。

長くつづく磯浜をどこまでも南に行くと銚子に至る。その手前の神栖町に、なぜか「平泉」という地名があり、「光」という名も地図にはあって、あれこれなお気になる所である。

(参加者) 佐々木秀円 菅野澄順 佐々木邦世 破石澄元

の方に向けるか、外の施餓鬼壇に向けるかで口論になったとか。

(高) とにかく、法式慣例に敵しい方で、黙ってなかった。

(邦) 法式だけでなくて衣・食にも。法要の後の御齋の汁に煮干しのダシを使ったのが発覚して叱られたとか。また、道場で「君、いつからそんな遠山の袈裟を着けられるようになったのか」って。

(高) 神事能の稽古も敵しかった。当事、北嶺老僧が太鼓をなさっておられました、「竹生島」の太鼓を、教えてやるから来いと言われてまして、習いに御自坊にうかがったわけです。修正会が済んですぐでしたから、寒中です。稽古用の太鼓を私に用意してください、老僧は、つばき縁を叩きながら

中尊寺の皆様へ

芳賀中学校 立志生 阿久津尚子
 こんにちは。先日は私達芳賀中学校の立志生がお世話になりました。初めて見る東北の日本、そして中尊寺を見たことはすごく感激しました。私達が何より見学し感動したのは金色堂です。平安時代から変わらない黄金の光をはなっているからです。金色堂を管理することはとても大変な仕事だと思います。見学できてよかったと思います。

本当に有りがとうございました。

の御教授でしたが、障子の隙間から風と雪が吹き込んできて、寒いのを通り越して……

これが稽古なんだって自分に言い聞かせたもんです。

(澄) 雪の季節といえば、二戸浄法寺村の天台寺を兼務して、年末に向こうに行っただけ、何か病気になったことがあった。

(邦) そう、『日誌』を見ると昭和二十七年の正月二日、北嶺僧正急病の由……と書いてありますね。(高) 当時は、行くのも大変な所で。まだ、御山の老杉が伐採される前でした。

(邦) とにかく、当時の執事長は新しい事業を企画して一山会議にかけるとき、まず、北嶺老僧の了解を得るのに苦労したようにで

す。その了解さえたいただければ、一山の方は何とかなる、って。

——いま、「それはならぬ」「それで世の中通るか」って、信念をもって叱る人がいませんね、六十代、七十代の方に。

(澄) あの頃は、たしかに物も金もなかったが、特に苦にも思わなかったし、却って、人の考え方や会話に余計なものが無かった。

(高) そう、「無動心院権大僧正亮詮大和尚」はまさに明治の間、「清貧」という言葉そのままの方でした。

芳賀中 二年一組 川上知也

六月十七日(木)に遠足で中尊寺を訪れました。一時間三十分という短い間でしたが、興味深く見学することができました。それは中尊寺の人達が毎日朝早くからいろいろな所の掃除をしてくれているからだと思います。中尊寺はともも広くて、坂道もあるのでとても大変だと思います。また、国宝を保管しているというところで、いろいろ気をつかったりするのでもっと大変だと思います。

これからも何度かおろかがいするかもしれませんが、その時はよろしく願います。

芳賀中 二年一組 黒崎重人

金色堂の輝きはとても感動させられました。あれほどの輝きに包まれた建物を見たのは、もちろん初めての事でした。

運良く天気にも恵まれ、さわやかな楽しい一日を過ごさせて頂きました。

中尊寺には僕達だけでなく、たくさんのお客さんもきていたの、他の人達に迷惑をかけないようになしようと心がけました。

中尊寺は、僕達にとって一生に一度の「立志の船」という旅での良い思い出の一つになりました。ありがとうございます。

『新潮文庫』より
まんだら人生論

無神論者は孤独
仏教徒は浄土共有

ひろ さちや

無神論者は孤独である。いや、真の無神論者はみずからの孤独に耐え得る人であるのだが、その孤独に耐え得ないインチキ無神論者が現代の日本にはうようよいる。無神論というのは、超越的な存在である神や仏がないという意見に与することではない。そうではなくて、他人がどう考えているかに無関係に、わたしは神や仏を信じないとみずからの信念を確立することである。そして、無神論者

は当然、死後の世界はないと信じている。それは、裏返しに言えば、キリスト教の天国、仏教の浄土があったとしても、自分は絶対にそこに行かないと決意していることなのである。仏教徒やキリスト教徒がどう思ってもいい。それとは無関係に、自分は「無」を信じている。それが真の無神論者である。したがって、無神論者は孤独である。仏教徒やキリスト教徒は死後の世界を「共有」しているが、無神論者には他人と「共有」できるものがない。無神論者はその孤独に耐えねばならぬ。

かつてわたしは、無神論者を自称する人から手紙で問われた。自分は死後の世界はないと思ってい

わたしは、死後の世界があるかいかと問う態度がおかしい、と答えた。わたしは仏教者として、浄土という死後の世界を共有しており、浄土はあるべきだと信じている。あるかないかではなく、あるべきだというのがわたしの考えだと返事をした。だが、その人は、おまえの考えはまちがいだと言いがかりをつけてくる。おかしいんだ。他人にかまわず、自分は「無」を信じていればいいのだ。それができないのが、インチキ無神論者なのである。

(宗教評論家)

『平泉落日』

小野寺公二 著

作家・小野寺公二氏が十月八日、慢性呼吸不全のため、府中市の病院で死去された。七十六歳。通夜・葬儀は、「府中の森市民聖苑」で執り行われた。

小野寺氏は岩手県生まれ。中央大学経済学部卒業後、作詩を仕事とする。その後、雑誌『暮らしの手帳』のルポルタージュを担当するなどのかたわら小説を執筆し、作家となる。

著書に『平泉落日』『新宿旗本無頼』『算学武士道』『南部一揆の旗』など多数。ことに、『平泉落日』は平泉藤原一族の興亡を扱った小説としては、文学界で初めての作品である。

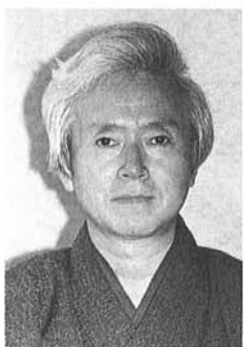
『河北新報』10月27日

東北を愛した作家

菅野洋一

呼吸不全と闘い執筆

最後の作品は、平成九年の「賊軍の狙撃者」(光文社文庫)。戊辰戦争で賊軍となった東北の二本松藩を舞台に、算学好きの青年を主人公としており、太平洋戦争の学徒出陣の記憶と重なる。戦死のシーンが結びだが、呼吸不全と闘いつつ、筆を執っていた作者自身



のこのようだ。

東北人らしく地味で、自分から売り込むことが嫌이었다。知人ぞ知る、という作家だったが、東北を舞台にした数多くの傑作があることは、もっと知られていい。洋子夫人への感謝が、美しい詩として遺されていた。

「あの世はほんとうにあるのだろうか 妻よ もし来世というものがないならば 私はあなたにおかえしすることができない 陽の光のような 愛を一身に浴びていたらぬことなき世話を受けて 妻よ もしあの世がなかったら 私はどうすればいいのか 私はいま 来世があってくれるよう 一心に念じている」

(東北工大名誉教授)

年中法会差定

霜月会天台大師御影供差定

導師 貫首大僧正孝信

唄・始經
鏡

伽陀

梵祭
行
音文
事華

願大真地葉瑠円利大常觀
成長珠藏樹璃教生德住音
就寿王光院院院院院院院
宏広澄康長春成邦澄仁慎高光澄秀澄最快円賢高秀
紹元照純生興寛世元秀有信中順円仁純恩融有円澄
不出 不出

慈覚大師御影供差定 (諸役)

導師 貫首大僧正

始鏡伽献祭鉢讚會
經陀茶文頭行

一月十四日

常徳住
大樹王
菜樹純
澄照
秀厚
快俊
広元

基衡公御月忌胎蔵界曼荼羅供差定 (諸役)

導師 貫首大僧正

唄始鏡逆散対供
經匿水華揚文

常徳住
大樹王
菜樹王
地蔵院
真珠院
願成就院

献茶・鉢

讚頭

平成九年十一月二十四日

秀光章澄快律晋五
厚聴興俊秀照大
不出 不出 不出 不出

修正会差定 (諸役)

本壇 貫首大僧正

牛玉導師 二老
後夜導師 三老
初夜導師
三十二相
円利大常
教生徳住
院院院院

梵音
華音
慎有他
勤之
澄照他
勤之

自正月元日 至八日

秀光章澄快律晋五
厚聴興俊秀照大
不出 不出 不出 不出

春彼岸会法華三昧差定 (諸役)

調声 貫首大僧正

始鏡伽献祭鉢讚會
經陀茶文頭行

三月二十一日

常徳住
大樹王
真珠院
澄長寿院
秀照厚

唱九方便・切音回向
大禮讚
仏智讚
甲四讚
着座・讚
列讚・讚
終讚

慎乗院有
法泉院
長純生院
康照
澄厚
秀俊

三月十九日

春彼岸会法華三昧差定 (諸役)

調声 貫首大僧正

始鏡伽献祭鉢讚會
經陀茶文頭行

三月二十一日

常徳住
大樹王
真珠院
澄長寿院
秀照厚

御神事能番組 五月四日

法楽
古美式三番

開口 佐々木慎有 大鼓 菅野宏紹
祝詞 菅野康純 小鼓 北嶺澄照
若女 佐々木長生 笛 清水広元
老女 三浦春興 後見 佐々木秀厚

能
ツレ三浦春興
後シテ 佐々木長生
前シテ 佐々木高円

竹生島 ワキ 菅野成寛 大鼓 北嶺澄照
ツレ 菅野澄順 大鼓 千葉快俊
ツレ 佐々木秀厚 小鼓 菅原光中
間 破石澄元 笛 佐々木秀円

五月五日

開口 佐々木慎有

〔陸奥教区宗務所報〕

□平成九年

十一月二十九日

一斉托鉢 三十五名 仙台市内

十一月三十日

教区研修会 三十七名 仙台清浄光院

講師 真珠院 菅野澄順

「光明供について」

□平成十年

六月二十五日

保護司、民生児童委員会総会 六名 秋保温泉ホテル佐勘

六月二十八日

寺院婦人得度 二十名 中尊寺

戒師 大僧正 千田孝信師

七月二日

布教師東北・北海道地区協議会及び研修会 五名 帯広市観音寺

十一月十四日

一斉托鉢 三十二名 弘前市内

十一月十五日

教区研修会 三十四名 三部薬王院

講師 真珠院 菅野澄順

「葬送作法の源流」

狂言 盆山 シテ 佐々木慎有
アド 破石澄元

能 シテ 佐々木邦世
ツレ 北嶺澄照

俊成忠度 ワキ 菅野康純 大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

秋の藤原祭り 中尊寺能 十一月三日

狂言 次郎冠者 菅野澄円 大鼓 千葉快俊
太郎冠者 破石澄元 小鼓 菅原光中

附子 主 佐々木慎有

能 シテ 佐々木邦世

枕慈童 ワキ 佐々木秀厚 大鼓 北嶺澄照
小鼓 菅原光中
笛 清水広元

第二部中尊寺関係

□褒賞

(平成九年十月二十四日～平成十年十月二十三日)

布教功労表彰

瑠璃光院 菅野最純

在職五十年勤続表彰

中尊寺 千田孝信

一宗公職歴任表彰

金剛院 破石澄元

□役職任免

一隅を照らす運動副会長委嘱

(平成十年四月一日～平成十四年三月三十一日)

天台宗典編纂所研究員任命 千田孝信

同電子仏典員任命

(平成十年四月一日～平成十三年三月三十一日)

同電子仏典員任命 佐々木邦世

(平成十年四月一日～平成十三年三月三十一日)

菅野康純



天台宗陸奥教区寺庭婦人得度式 平成10年 6月28日

真珠院副住職任命 (平成十年六月二十九日)
菅野澄円

布教委員会委員任命
(平成十年七月一日～平成十四年六月三十日)
菅野澄順

□ 教師補任

(平成十年四月二十一日～平成十年六月十九日)

僧正	真珠院	菅野澄順
僧正	地藏院	佐々木秀円
大僧都	積尊院	菅野成寛
僧都	利生院(法)	菅野宏紹
僧都	地藏院(法)	佐々木秀厚
権少僧都	長楽寺	佐々木慎有
権少僧都	観音院(法)	清水広元
□ 寺庭婦人得度 (平成十年六月二十八日 中尊寺)	真珠院	菅野美弥子(順裕)
	大徳院	佐々木より(白苑)
	大徳院	佐々木泰子(史穩)
	大徳院	佐々木こずえ(京夏)
	薬樹王院	北嶺直子(眞信)

薬樹王院	北嶺百合子(蓮照)
願成就院	三浦道子(信蓮)
願成就院	三浦みゆき(幸蓮)
瑠璃光院	菅野タカ(孝晴)
瑠璃光院	菅野豊子(豊香)
地藏院	佐々木素子(素淳)
地藏院	佐々木博美(静心)
利生院	菅野レイ子(円礼)
観音院	清水真澄(真澄)
大長寿院	菅原美智子(智音)
常住院	佐々木タミ子(民徳)
常住院	佐々木浩子(妙浩)
円教院	千葉年子(真鏡)
円教院	千葉顕子(顕妙)
金剛院	破石貞子(眞静)
□ 遷化 (平成十年三月二十七日)	
积尊院寺婦	菅野克子

小柄な大輪 琴錦関とご一緒に

明春(二月三日)

「大節分会」 歳男 歳女

お申込み承ります

今場所優勝した大輪・琴錦関を迎えますので、希望者が例年よりも相当多くなるものと思われまます。お早めにお申込みくださいませ。

(男) 二十五歳・四十二歳・還暦・当たり歳の方
(女) 十九歳・三十三歳・還暦・当たり歳の方

詳細は、中尊寺事務局 法務部 までご連絡ください。

☎〇一九一―四六一二二二一

執務日誌抄

平成九年十一月～十年十月

平成九年

◇十一月

十日 金色堂國寶指定百年記念祭

結願法要

藤原四代公追善紺紙金字法

華経奉納十種供養会

(書家・植村和堂師一行五〇名、

總代一四名、詠歌二八名、一山総

出仕。本堂・金色堂)

十一日 秘仏一字金輪仏頂尊坐像抜

魂法要(不動堂)

栃木教区龍泉寺様二五名団

参(貫首挨拶)。

十二日 秘仏室解体

企画展「示物返却」(十四日、

管財部澄元)

岩手県観光総合研修会(事

業部慎重、職員三名 於花巻温泉)

梵焼供初行修行(十八日、

薬師王院後住澄照 開山堂)

十三日 タイ国大使夫妻来山(貫首。

執事長、本山出向(天台宗布

教師総結集 於比叡山延暦寺)。

観光エージェンメント意見交換

会(事業部慎重、於志戸平温泉)

十四日 JTB 関西方面支店より現

地視察に来山(慎重案内)。

貫首、一関地方振興局にて

講話。

十五日 長島小学校統合二十周年記

念式典(執事長)

新讚衡蔵(宝物館)建設予定

地発掘調査現地説明会(平

泉町教育委員会)

十六日 関山会(せきざんかい・地元青

年会) 十周年記念式典

(貫首講話、二老常住院・三老大

徳院・執事長ほか於平泉レストC)

栃木教区大通寺様三六名団

参(貫首案内)。

十七日 東文研中里寿克氏、道明氏

来山(中尊寺紺紙金字経紐調査)。

十八日 職員研修旅行第一班(二十

十日、長野方面)

十九日 県道相川平泉線高館橋下部

工事安全祈願(執事長)

中尊寺総合調査(二十二日、

調査団代表・有賀祥隆氏)

一関警察官友の会創立五周

年記念祝賀会(執事長)

二十日 町民号(二十二日、白山比咩

神社・能登半島方面 参務高信)

文化庁主任調査官益田兼房

氏来山(防火施設工事現地指導)。

二十一日 一関商工会議所五十周年記

念祝賀会(執事長 於(ペリーノH)

不動堂本尊抜魂並びに秘仏

二十九日 全国一斉鉢鉢・教区研修会

(三十日、一隅を照らす運動、

七名参加。於仙台満願寺・清浄光院

貫首、盛岡で講話(東北大学

青葉会、於イトロボリタンH)

◇十二月

一日 月次大般若会(本堂)

二日 盛岡市鉈屋町千手院前任職

矢沢亮祐師葬儀(導師貫首、

一山より八名出仕)

三日 初詣打ち合わせ(於役場)

五日 観光エージェンメント、記念祭

協力御礼挨拶回り(都内、執

事長・事業部澄照出向)。

七日 薬師会(讚衡蔵)

「フォーラムいわて 21」

西磐井支部総会(貫首・執事

長於(ペリーノH)

八日 文化観光施設等整備運営委

員会(執事長 於役場)

十日 寺報『関山』第四号発行

山内年末風景マスコミ取材。

ブランドサイプレス・フロリダ

支店長来山(執事長案内)。

十一日 初詣警備会議(執事長・管財

部康純 於西行苑)

観光エージェンメント・出版関

係、記念祭協力御礼挨拶回

り(東京方面 事業部慎重)。

十四日 弥陀会(本堂)

十七日 白山会(本堂)

文化庁ほか年末挨拶(執事

長・管財部澄元)

十八日 観光エージェンメント、記念祭

協力御礼挨拶回り(仙台方面

事業部慎重)。

十九日 臨時一山会議

新讚衡蔵建設安全祈願法要

(鈴木嘉吉委員長、設計・建設業

者ほか 不動堂)

二十日 一関市鈴木幸男氏叙勲祝賀

会(三老大徳院、於(ペリーノH)

二十一日 貫首、東京出張(植村師へ)。

一字金輪仏還座法要

二十三日 天台会御逮夜(結衆勤 本堂)

不動堂本尊入魂法要

二十四日 天台会厳修(御影供 本堂)

二十五日 職員研修旅行第二班(十七日)

二十六日 第四回新讚衡蔵建設委員会

鈴木嘉吉委員長・牛川喜幸

氏(長岡造形大教授)・大塚英

明氏(文化庁美工課)・柳雄太

郎氏(文化庁記念物課)・千葉

勝美氏(県文化課)ほか(町

埋文(木沢・及川)・三衡設計

舎(勝部・小野寺)。

寺より貫首・執事長・菅野

澄順・佐々木邦世・破石澄

元(於Hサンルート一関)

二十七日 貫首・老分白水阿弥陀堂参

拜(二十八日、福島方面)。

新讚衡蔵建設委員会現地視

察、宮野秋彦氏(名工大名誉

教授)も出席。

月例法話の会(釈尊院成寛)
二十四日 文殊会(経蔵)
二十五日 修正会の準備(結果勤)
二十八日 恒例御供餅つき
三十一日 午後三時、一山総礼

平成十年

◇一月

一日 新年祈祷護摩供修行(本堂)
六時 東山町「若水送り」着
十時半 総礼。
修正会 釈迦供(本堂)
結果堂籠り(七日、開山堂)
二日 九時半 正月祈祷護摩供(本堂)
十時 修正会 薬師供(讃衡蔵)
十四時 謡初め(庫裡広間)
県副知事吉水國光氏来山
(国道四号線交通事業視察)。
三日 九時半 正月祈祷護摩供(本堂)
修正会、山王供(山王堂)
十一時半 元三会 慈恵供(本堂)

四日 修正会 薬師供(留璃光院)
五日 修正会 文殊供(経蔵)
大般若会(利生院弁財天堂)
梵焼供(結果勤、開山堂)
結果、本日より寒修行。
(町内托鉢)
六日 修正会 釈迦供・月山供
(釈迦堂)
町新年交賀会(執事長)
七日 修正会 白山十一面供(本堂)
大般若会(本堂)
十四時 修正会 弥陀供(金色堂)
春の祭礼神事能番組決定
「俊成忠度」
八日 修正会 結願 薬師供(讃衡蔵) 一字金輪仏・千手観音
法楽
十三時 恒例「金盃披き」
(一七〇名参加)
九日 岩手県庁ほか年賀挨拶回り。
北参道舗装工事開始(建設

省ウォーキングトレイル事業)
十日 桜友会(民区老人会) 新年会
十四日 慈覚会(御影供 本堂)
月例法話の会(講師貫首)
二十一日 一関市願成寺前任職葬儀
(三老大徳院)
東文研三浦定俊氏金色堂空
調施設調査来山。
二十二日 節分講中総会(法務仁秀ほか
於泉橋庵)
二十三日 貫首、東京で講話(浅草寺仏
教文化講座、於新宿・安田ホール)
盛岡市千手院信徒様来山。
二十四日 貫首、一関で講話(国際ソロ
プチミスト一関、於ベリーノH)
二十六日 文化財防火デー(一関地区消
防団防火演習) 中尊寺特設消
防隊出動。
二十七日 貫首、京都出張(瀬戸内寂聴
師文化功労祝賀会、於都日)。
山内漏電検査
菊まつり写真コンテ審査会

二十八日 新讃衡蔵建設現地指導()
二十九日、鈴木嘉吉委員長ほか
三十日 貫首、天台宗務庁へ出向。
(一隅を照らす運動理事会)

◇二月

一日 月次大般若会(本堂)
二日 天台宗ハワイ別院荒了寛師
来山(貫首応接)。
三日 恒例大節分会。関取琴錦、
歳男歳女六一名・町内園児
が豆を撒く。
寒修行満行。
六日 一山協議会
政治評論家山本峯章氏来山。
十四日 涅槃会御逮夜(本堂)
新讃衡蔵建設事務局会議
(九年十月二十五日付辞令)。
局長菅原光中。次長菅野澄順、同
佐々木邦世。委員佐々木仁秀・破
石澄元ほか

月例法話の会(常住院後住長生)
十六日 悉曇伝修会(講師、後藤仁田師)
十七日 中尊寺・毛越寺両山懇親会
十九日 中尊寺総合調査(二十日、
調査団代表・有賀祥隆氏)
二十二日 民区公民館十周年記念式典
(貫首ほか 於平泉文化史館)
二十三日 岩手県観光連盟修学旅行誘
致説明会(二十五日、大阪市
事業部慎有)
二十四日 貫首、講話(平泉高齢者大学)
神事能「俊成忠度」初稽古
二十五日 新讃衡蔵建設工事の寺内説
明会(鈴木嘉吉委員長、三衛設計
舎、松井建設ほか)
二十六日 平泉町観光協会総会(執事
長ほか 於平泉商工会館)
岩手日日文化賞授章式(執
事長 於ベリーノH)
二十七日 文化観光基金運営委員会
(執事長 於役場)

東京国立文化財研究所情報資
料部長松島健氏逝去
◇三月
一日 月次大般若会(本堂)
スポーツ評論家山口香氏来山。
三日 菊まつり協賛会役員会
四日 中尊寺門前会研修旅行(五
日、貫首ほか一〇名参加。志津
川方面)
十日 新讃衡蔵建設事務局会議
十一日 発掘現場埋め戻し作業開始。
十二日 映画監督羽田澄子氏来町(衣
川館ほか、仏文研邦世案内)。
十三日 新讃衡蔵建設委員会
鈴木嘉吉委員長・牛川喜幸
氏・渡辺明義氏(東文研所
長)・宮野秋彦氏。
他に、町埋文(菅原・本沢・
及川)・三衛設計舎(勝部)・
松井建設(中村・郷家・石井作
業所長)
仏文研邦世、講演(北関東・

十五日 涅槃会(本堂)

東北シートの工業総会、於日志戸平
十四日 新贖衡蔵「地鎮式」
十五日 宗議会議員選挙管理委員会
十六日 宮城県教育長高橋孝夫氏来山
（東北歴史博物館建設に伴う「最
勝王経」複製について）。
十七日 栃木県布教師会様五名来山
（貫首挨拶）。
十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）
月例法話の会（瑠璃光院後住
康純）
定例一山会議
総代長千葉清氏退任。
新たに川坂浩氏総代就任。
二十一日 春彼岸会法要（法華三昧）
二十四日 開山会議摩供（開山堂）
一山会議（継統）
二十五日 NHKエンタープライズ21社長
齊藤曉氏来山（貫首挨拶）。
二十六日 「鎌倉頼朝の会」様一行来
山（仏文研那世案内）。
岩手県観光課台湾旅行エー

ジェント招待事業にて台湾
旅行エージェント各社より
来山（総務部慎有案内）。
二十七日 岩手県観光推進実行委員会
（総務部慎有 於盛岡日東日本）
山内積尊院成寛母堂儀逝去
二十九日 北上市歎喜院前任一周忌
（執事長ほか出席）
三十一日 釈尊院住職母堂葬儀（本堂）
◇四月
一日 月次大般若会（本堂）
一山辞令交付
三日 陸奥教区寺庭婦人会岩手支
部役員会（大広間）
北参道舗装工事（建設省ウオー
キングトレイル事業）
四日 陸奥仏教青年会総会（広間）
五日 檀信徒総代会総会開催。
新総代長に坂下岩淵汪氏を
選任。
七日 平泉文化観光施設等整備運
営委員会（執事長 於役場）

八日 仏生会（本堂）
月例法話の会（葉樹王院後住
澄照）
十二日 恒例花まつり（貫首法話）
町内毛越にて山林火災有
り、午前九時五十分鎮火。
十四日 神事能申し合わせ（大広間）
十六日 能楽堂保存修理工事完了奉
告祭（二老常住院・三老大徳院・
執事長ほか出席。白山神社）
「春の藤原まつり」交通警
備会議（執事長・管財部・事業
部・於西行苑）
十七日 貫首・執事長、仙台仙岳院
出張（21世紀記念事業「鎮守の森」
起工披露 於仙台国際H）。
観音講（山内観音院）
菊まつり協賛会総会。
十八日 松井建設社長松井角平氏来
山（貫首挨拶）。
西行祭短歌大会実行委員会
（総務部）

十九日 真珠院後住澄門、本日より
事務局勤務。
二十日 陸奥教区会・一隅理事会開
催。
二十一日 神事能申し合わせ（大広間）
二十二日 平泉駅開業百周年記念行事
実行委員会（執事長 於役場）
一関地区防災協会総会（管
財部康純 於両磐地区消防本部）
古実式三番申し合わせ
二十四日 春の藤原まつり担当者会議
（執事長・事業部澄照）
二十六日 古実式三番申し合わせ
二十七日 北海道東北開発公庫副総裁
竹内透氏来山（執事長案内）
神事能申し合わせ（能楽堂）
二十八日 平泉菊花会総会（執事長）
二十九日 第十九回西行祭短歌大会
（講師 京都大学教授永田和宏氏）
◇五月
一日 春の藤原まつり開幕
藤原四衝公追善法要、稚児

行列、常の如し。
郷土芸能、胆沢町柳田念仏
剣舞奉演。
二日 開山護摩供（開山堂）
いわき内郷青年商工会議所
様一行八名来山。
郷土芸能、赤伏神楽・達谷
窟毘沙門神楽奉演。
三日 源義経公東下り行列
いわき太鼓奉演。
四日 古実式三番
神事能「竹生島」
郷土芸能行山流都鳥鹿踊
朴の木沢念仏剣舞奉演。
五日 「開口」・狂言「盆山」
神事能「俊成忠度」
郷土芸能行山流長部鹿踊
達谷窟毘沙門子供神楽奉演。
六日 山王講（山王堂）
一八時三〇分頃、東北高速
道中尊寺西・戸河内口にて
車輛事故による火災発生。

付近の土手に延焼。町内消防
車出動。中尊寺特消七名待
機。一九時三〇分無事鎮火。
七日 陸奥教区寺庭婦人岩手支部
総会（於毛越寺）
文化財愛護協会総会（管財
部澄元 於県立博物館）
八日 能ワキ方豊嶋十郎師葬儀
（千葉県市川市 成寛弔問）
十一日 新贖衡蔵建設事務局会議
十三日 岩手県警察本部長篠宮隆氏
来山。
十四日 東京教区自證院様一四名参
拜。
十六日 貫首、水沢市にて講話（於
社会福祉法人「寿水会」）
仙台市「仙台青葉能」（貫首
ほか一山五名出向。於宮城県民会
館 一六〇名満席）
十七日 月例法話の会（観音院後住広元）

- 十八日 平泉駅開業百周年記念行事
実行委員会（執事長 於役場）
- 十九日 エッセイスト岸本葉子氏来
山取材（平泉文化会議所「東方
に在り」掲載）。
- 二十一日 岩手県観光推進実行委員会
常任委員会・総会（執事長
於盛岡グランドH）
- 二十二日 岩手県雇用開発協会一関支
部総会（総務部広元 一関市）
- 二十三日 ハワイ別院荒了寛師来山（貫
首応接）。
- 二十三日 貫首、高崎市へ出張（群馬
教区薬王寺照源大僧正本葬）。
- 平泉文化会議所セミナー
「藤島亥治郎氏最終講義」
（交誼）後援（於平泉文化史館、
二七〇名聴講）
- 二十四日 警察大学副校長深山健男氏
ほか来山。
- 藤島亥治郎先生来山（貫首
挨拶）。「藤島先生を囲む夕」

- 二十五日 共催。（於町内泉橋庵）
一関地区交通安全協会理事
会・総会（総務部慎有 於幸生
会館）
- 二十六日 陸奥教区寺庭婦人会定例総
会・研修会（二十七日、貫首、
執事長、法務仁秀）
- 三十日 中尊寺杯（秋田・宮城・岩手選
抜中学校）バスケットボール
大会開会式（於平泉勤労者体育
センター）
- 平泉内科クリニック開業祝
賀会（貫首、執事長）
- 三十一日 喜桜会連合大会（三十一日、
能楽堂）
- ふるさと平泉会総会（執事
長出席 於上野・Hパークサイド）
- ◇六月
- 一日 月次大般若会（本堂）
- 五日 伝教会（御影供 本堂）
- 五日 貫首、盛岡市にて講話（岩
手県警察職員研修会）
- 二十二日 岩手黄金王国総決起集会（執
事長・事業部澄照 於一関瑞泉閣）
- 二十三日 中尊寺総代研修旅行（二十
五日、佐渡方面 法務長生）
- 二十五日 栃木教区観音寺様十名参拜。
（貫首挨拶）。
- 二十八日 陸奥教区第二部・三部
寺庭婦人得度式（戒師中尊寺
貫首、度者五四名 本堂）
- 二十九日 芭蕉祭全国俳句大会（本堂・
大広間）
- 新讀衡蔵建設事務局会議
- ◇七月
- 一日 月次大般若会（本堂）
- 中尊寺新能奉賛会理事会
（総務部慎有）
- 二日 天台宗布教師連盟東北・北
海道地区協議会総会（三
日、一山四名参加。於帯広観音寺）
- 四日 中尊寺総合調査概要報告会
（調査団代表・有賀祥隆氏・水野

- 六日 お経を読む会「ひろさちや
仏教講話」（まんだらの会三
五名をはじめ一六〇名参加。本堂）
- 七日 山内地蔵院前住二十三回忌
法事（貫首ほか 地藏院）
- 平泉駅開業百周年記念式典
（執事長）
- 八日 梵焼供初行修行（十五日、
観音院後住広元 開山堂）
- 十三日 栃木教区常珍寺様六名参拜
（貫首挨拶）。
- 山家学会（於大正大 仏文研究
- 五日 法華経一日頓写経会
（植村和堂師ほか一一五名参加）
- 六日 新讀衡蔵建設事務局会議
- 七日 平泉小学校六年生「ふるさ
と学習」（講話 澄円）。
- 八日 貫首、宇都宮市にて講話（関
東高等学校PTA連合会、於宇都
宮マロニエプラザ）
- 天台宗新成会懇談会（九
日、宮城県秋保 貫首・宗務所長
光中、副所長澄順出向）。
- 観光エージェンツ誘客挨拶
回り（十日、大阪・名古屋市内
総務部慎有）。
- 九日 栃木県鹿沼市保護司会様一
行二五名来山（貫首挨拶）。
- 十日 貫首、盛岡市にて講話（岩
手県高等学校PTA連合会、於県
民会館）
- 十一日 新讀衡蔵建設状況説明会
（鈴木嘉吉委員長ほか）



- 十二日 奈良市正暦寺様二名参拝。
- 十三日 岩手県観光エージェンツ招待事業一六名来山(総務部慎有)。
- 十四日 新讚衡蔵建設事務局会議
- 十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂) 如法写経十種供養会、頓写法華経奉納式(金色堂まで練行) 岩手県観光誘致説明会(事業部澄照 於東京飯田橋) 栃木県鹿沼市宇賀神緑(株)よりヤツデほか鉢植奉納。
- 十八日 平泉水かけ神輿宵宮(執事長)
- 十九日 平泉総社神輿渡御(金色堂前にて貫首挨拶)
- 二十日 東京富岡八幡宮氏子一行様 四〇名来山。
- 二十二日 紀州熊野路研修(二十四日、地藏院秀円・円乗院邦世・釈尊院成寛) 紺紙金字写経会(黄金王国マスコミ招待会一行七名)

- 二十三日 東急ホテル社長中島貢氏来山(貫首応接)。
- 二十三日 紺紙金字写経会(一山、寺庭婦人、職員、門前会、八八名参加)
- 二十四日 中小企業金融公庫役員様 一四名参拝。
- 二十五日 東京共立女子学園中学校長 沢辺宇一氏来山(貫首挨拶)。
- 二十九日 恵泉女学園短期大学長島時子先生より、泰衡公首桶内採取のハス開花の連絡あり(執事長・仏文研邦世・管財部澄元、伊勢原市出向)。
- 三十日 「中尊寺ハス」開花・記者発表(広間)
- ◇八月
- 一日 月次大般若会(本堂)
- 三日 盛岡市岩根哲哉様より『円仁の道』五〇冊贈呈される。
- 四日 「平和の鐘」打鐘、十五時半。
- 五日 新聞協議会労務担当者研究

- 会一〇名参拝。
- 執事長、テレビ岩手インタビュー(「中尊寺ハス」について)
- 六日 愛知県海部郡町村長一行 一五名参拝。(総務部慎有法話)。
- 七日 夏安居(結衆勤、開山堂)
- 十日 梵焼供(結衆勤、常の如し)
- 十四日 第二十二回中尊寺新能能 「百万」(佐々木宗生) 「綾鼓」(粟谷能生) 「綾鼓」(野村万作・萬齋) (雷雨にて中断あり)
- 十六日 第三十四回平泉大文字まつり
- 十七日 田辺市長野小学校長栗原和子氏来山(貫首挨拶、昭和五十八年「いちいの木」贈呈先)
- 二十日 毛越寺施餓鬼会(三老大徳院)
- 二十二日 群馬教区西福寺様三八名団参。
- 二十三日 大施餓鬼会御逮夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会(本堂)
- 二十五日 貫首・執事長、日光出張(二十六日、世界文化遺産登録研修)

- 三十日 山内薬樹王院前住五十回忌・内室一周忌法事(本堂)
- 三十一日 町内竜玉寺大施餓鬼会 (一老常住院高円参列) 山形県瀬見温泉亀割観音例祭(真珠院澄順出向)

◇九月

- 一日 月次大般若会(本堂) 東京都小岩金網様一行来山(貫首法話)。
- 一関市鈴木幸男氏労働大臣功績賞受賞祝賀会(執事長於ペリノH)
- 二日 故工藤巖氏(前県知事)葬儀(執事長 於盛岡報恩寺)
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂) 最近、岩手山の火山活動兆候あり心配される中、本日また地震。雫石にてM6。
- 五日 全国マルチメディア祭'98 in いわて「平泉フォーラム」(執事長出席 於毛越寺)

- 六日 日中青年交流協会平野仁氏来山(貫首挨拶)。
- 貫首、東京都にて講話(孝道教団、於東京読売ホール)
- 高知県知事橋本大二郎夫妻・三重県知事北川正恭夫妻ほか、増田知事夫人の案内にて来山(執事長挨拶、一行二三名)。



八日 「いっくら国際文化交流」 「中尊寺ハス」NHK総合テレビにて放映。

- 会」一行来山(貫首挨拶)。
- 県教育次長相原正明氏来山(管財部澄元)。
- 貫首、盛岡市にて講話(志学塾、於バルソビル)
- 九日 東北銀行常務菊池勇夫氏来山(執事長挨拶)。
- 十日 紫波町五郎沼薬師神社例祭(一老常住院高円出向) 宮城県栗原・登米・気仙沼本吉地区観光振興懇談会(執事長 於登米町・伝統芸能伝承館)
- 十一日 ドイツワイン醸造協同組合長シュテファン・クノプフ氏一行来山(総務部慎有案内)。
- 十二日 環境庁政務次官栗原博久氏ほか三名来山(執事長案内)。
- 十三日 一関市骨寺村調査協力委員会・報告会(執事長 於一関総合防災センター) 花巻・平泉・遠野観光客誘

- 致情報交換会にて札幌・名古屋の観光エージェンツト来山（事業部澄照案内）。
- 十四日 善光寺大勧進石塚慈光様御内室通夜（貫首出向 於日光安養院）
- 十五日 紫波町峰神社例祭（利生院内融建設省東北地方建設局河川部長山根昭氏来山（執事長挨拶）。
- 十六日 暴風雨（台風五号）参拝者安全のため一時月見坂通行止。
- 十七日 岩手県修学旅行誘致説明会（十八日、札幌市、事業部澄照）
- 十八日 全国消防学校長役員会、中尊寺自衛消防体制視察に来山（管財部康純応対）。
- 県東京事務所物産観光センタ―所長佐藤吏氏来山（執事長挨拶）。
- 十九日 赤堂稲荷例祭
- 二十二日 一山協議会
- 二十三日 秋彼岸会（法華三昧修行 本堂）
- 東北六県市議会議長会議一行六〇名参拝。
- 十六日 信越教区伊那部様二二四名団参（執事長挨拶）。
- 韓国全羅北道漆工調査団一〇名来山（管財部澄照案内）。
- 十七日 能申し合わせ（大広間）
- 十八日 暴風雨（台風十号）で月見坂通行止。
- 社会福祉施設黄金荘収穫祭（執事長）
- 月例法話の会（円教院後住快俊）
- 平泉文化会議所セミナー
- 講師 鈴木嘉吉先生「世界遺産を語る」（貫首ほか会員出席。於日武蔵坊、一五〇名）
- 十九日 白虎堂例祭（山内薬師王院）
- 二十日 第十三回菊まつり（十一月十五日）
- 二十二日 平泉町戦没者追悼式（総務部慎有 於毛越寺）
- 公安調査庁次長書上由紀夫

- 月例法話の会（地藏院後住秀厚）
- 二十五日 菊まつり協賛会役員会
- 二十六日 日光輪王寺大護摩堂落慶法要（貫首参列）
- 二十九日 日光民生委員児童委員協議会一行三〇名来山（貫首案内）。
- ◇十月
- 一日 月次大般若会（本堂）
- 二日 慈眼会（本堂）
- 貫首、一関市にて講話（第四十四回岩手県小中学校長研究大会、於一関文化センタ―）
- 神奈川教区泉福寺様三二名団参（参務秀円案内）。
- 山内大池跡発掘調査開始（予定二カ月間）
- 三日 日光高校同窓会一行二四名来山（貫首挨拶）。
- 五日 長野県西光寺様一七名団参（執事長案内）。
- 天台寺秋季例祭（参務高信）
- 六日 孝道教団岡野副統理様ほか
- 氏来山（総務部広元案内）。
- 二十三日 「ふるさとの作家と語るゆらべ」（仏文研邦世 於世婚の二）
- 執事長、宗務庁へ出向（宗務所長会議）。
- 放送大学沖縄学習センタ―所長尚弘子氏来山。
- 二十六日 仙台市大願寺様二九名団参（阿波之介塚参詣）。
- 大阪泉秀二氏来山。
- 能申し合わせ（能楽堂）
- 二十七日 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）
- 二十八日 岐阜県白鳥町収入役荒井吉夫氏ほか来山（執事長挨拶）。
- 二十九日 暴力団追放県民大会
- 一関地区大会（執事長 於一関文化センタ―）
- 佐賀県伊万里市久保文昭夫妻来山（総務部広元案内）。
- 琵琶奏者田中旭泉師来山（金色堂にて奉演、総務部慎有）。
- 三十日 全国マルチメディア祭'98 in



新護衛蔵建設工事

- 一七名参拝（貫首案内）。
- 東京都願行寺様五〇名団参（参務澄照挨拶）
- 八日 惠泉女学園短大長島時子氏講演「中尊寺ハス」の経緯講演。一二〇名参加 大広間。
- ウォーキングトレール事業研修会にて建設省道路室長甲村謙友氏ほか二〇名来山（執事長案内）。
- 九日 地方銀行経済研究協議会一行一九名来山。
- 十一日 酒田三十六人衆代参にて尾関恒夫様夫妻来山（貫首挨拶）。（胆沢町出身）作家小野寺公二氏葬儀（仏文研邦世 於東京都・府中の森聖苑）
- 十三日 新護衛蔵建設事務局会議
- 十五日 小山市興法寺落慶式（貫首）
- 美術院創立百周年祝賀会（執事長 於グランビア京都）
- 亜細亜大学教授游仲勲氏来山。
- いわて「平泉フォーラム」実行委員会（執事長 於役場）
- 一山協議会
- 日本レーシングサービステ屋國夫氏ほか三名来山。（貫首挨拶）
- 三十一日 天台宗務庁社会部長志鳥融真師来山。（貫首応接）

浄財御奉納者 御芳名

平成九年

十二月 一関信用金庫様

中之坊様

(株)小西美術工藝社様

東北銀行様

北上市 歓喜院様

秋田県能代市 上村松吾様

(有)平泉観光写真社様

五万円

五万円

二拾五万円

五万円

五万円

五万円

七拾万円

八月

東日本合唱祭実行委員会様
浄土宗 岩手教区様

一関信用金庫様

栃木県 櫻本院様

群馬県 西福寺様

(株)エルシージャパン 斉藤征次様

東京都 安息会様

宮城県 今野玲子様

日光市 児童民生委員一同様

神奈川県 泉福寺仏教婦人会様

栃木県 日光高校同窓会様

孝道教団 岡野副統理様

日本鑄鉄管株式会社 木村太一様

天台宗 信越教区
伊那部参拝団様

七月 鹿沼保護区保護司会様

宇賀神緑販株式会社様

(株)東急ホテルチェーン様

東日本合唱祭実行委員会様

浄土宗 岩手教区様

一関信用金庫様

栃木県 櫻本院様

群馬県 西福寺様

(株)エルシージャパン 斉藤征次様

東京都 安息会様

宮城県 今野玲子様

日光市 児童民生委員一同様

神奈川県 泉福寺仏教婦人会様

栃木県 日光高校同窓会様

孝道教団 岡野副統理様

日本鑄鉄管株式会社 木村太一様

天台宗 信越教区
伊那部参拝団様

三万円

三万円

三万円

八万円

五万円

三万円

三万円

三万円

三万円

三万円

五万円

二拾万円

三万円

三万円

三万円

三万円

三万円

三万円

赤堂稻荷鳥居奉納

平泉ホテル 武蔵坊様

不動尊祈願

平成九年九月〜平成十年十月

青森県 盛田悠三様

三戸町 坂本幸男様

川崎村 佐藤卓三様

青森県 北山肇様

笠原山不動院代表
小笠原喜世様

宮城県 佐藤正様

一関市 山平様

衣川村 グリスタール外
代表取締役 千葉繁様

一関市 精茶百年本舗様

宮城県 (株)ユニバーエンジニアリング様

栗原郡 (有)金成工務店様

平泉町 川嶋印刷(株)様

七万円

御供物

参万円

五万円

七万円

九拾万円

参万円

三万円

参拾二万円

参万円

参万円

参万円

拾万円

岩手地酒協同組合様

寺田建設(株)様

東北鉄構工業連合会
岩瀬講中

福島県 代表 五十嵐喜光様

秋田県 (有)柴田土建様

仙台市 佐藤建設工業(株)様

藤沢市 矢舖邪子様

一関市 (有)豊隆軌道千葉幸八様

青森県 富士建設株式会社
代表取締役社長松下功一郎様

二戸市 米沢功様

三戸市 工藤銀四郎様

四万円

参万円

拾二万円

七万円

参万円

参万円

参万円

参万円

五万円

毎月御供物

毎月御供物

篤信各位の御芳志のほど感謝申しあげます。

▽今年ほど、「異常」とか「危機」という活字が頻繁に、日常的に使われたこともない。異常気象とは、二十年間の平均値からそれに嵌まらない状況をいう。が、実は二十一年前にやはり大洪水があつて、そこから起算して平均値を設定すると、異常でなかったか。つまり、あくまでも目安であつて、人の血圧のようなものと思えばいい、と「産経抄」に。

▽異常は気象だけでなかった。岩手山の火山性地震も心配された。噴火はなかったものの、九月三日にM6の地震があつて以来、心理的・社会的影響は尾を引いている。

▽本誌巻頭の、「爾時」の文中、実は貫首の原稿には

中尊寺の古代ハスが一輪の花を開かせた「爾の時」、天地は六種に振動して、悲劇の御館の作仏を尊重讃歎したのであるとあつた。無論、大地が六種に振動しては、法華経に説かれるところである。が、一般の方にはこれが岩手山の地震のことかと誤解されるのでは、とクレームがついて、削らせていただいた。笑えない事実である。

▽新・讃衡蔵建設に原因する発掘調査で、地層に白い線が確認された。十和田か岩手山か、いずれ火山灰が降った層とみられる。

▽校正を、帰山した菅野澄円君にも手伝ってもらつた。

〔佐々木邦世〕

中尊寺〈寺報〉『関山』第五号

平成十年（一九〇）十二月一日

発行 中尊寺

（執事長 菅原光中）

〒029 4194 岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)

本誌掲載の大槻文彦肖像・言海各種は
一関市博物館取蔵資料です。

年中行事 (抄 出)

1月1～8日	修正会	6月4日	伝教会
1月14日	慈覚会	6月20日	蓮光忌
2月3日	節分会	6月第4日曜日	法華経一日頓写経会
2月15日	涅槃会	7月17日	清衡公御月忌
3月19日	基衡公御月忌	8月24日	大施餓鬼会
3月彼岸	春彼岸会	9月3日	泰衡公御月忌
3月24日	開山会	9月彼岸	秋彼岸会
4月8日	仏生会	10月2日	慈眼会
5月1～5日	春の藤原祭り	10月28日	秀衡公御月忌
	1日藤原四代公追善法要・稚児 行列／4日～5日御神事能	11月1～3日	秋の藤原祭り
5月6日	山王講		1日藤原四代公追善法要・稚児 行列／2日菊供養会／3日能楽
		11月24日	天台会

月次法要

毎月1日	大般若転読会
毎月28日	不動尊護摩供



紺紙金字写経

恒例催事

4月29日	西行祭短歌大会
5月3日	源義経公東下り行列
6月29日	芭蕉祭全国俳句大会 (会場毛越寺と隔年)
8月14日	中尊寺新能
8月16日	平泉大文字まつり
10月20日	中尊寺菊まつり
～11月15日	

平成11年度 平泉総社神輿渡御日程

7月17日	「宵 宮」
7月18日	「神輿渡御」